









特9
155

大 高 源 吾

赤穂大高源吾

第一席

加藤由太郎速記

明治

41 6 9

内本

五万三千石淺野内匠頭長矩公の家臣が忠義の爲め苦心して酒屋に成り八百屋になり蕎麥屋に成りて一年九月の苦心をしたお話しは歎かさいますが其中に大高源吾忠雄といふ人がございす此方は俳諧を能くいたしまして俳名を子葉と云て元祿年間の名人と云はれた寶井其角又は嵐雪杯いふ人と共に文藝に並んだこともありました時は元祿十五年十二月十三日の事で前日より心注いで義黨四十餘人が色々に妻を奪す者もございしましたが未だ竹賣りに成つた者は一人も無いソコで源吾は十三日の朝扮装

大 高 源 吾

拵ひをいたして、煤拂ひの竹を買出して、松坂町の吉良様の屋敷の廻りを竹屋と呼びながら三四度廻りました。唯今は斯様な商ひはございませぬが昔は暮になりませぬと煤掃に使ふ竹葉の附た儘のを能く賣つて参りましたもので、俳諧師の源吾が何所で算段をしたか膝の抜けた千草の股引に肩の抜けた七ツ下りのボロ袴天左も、賈しいといふ風を爲て竹を擔ぎ吉良の屋敷の廻りを廻つて歩きまされたが何所でも呼込んで呉れる者がありません。一本でも竹を買つて呉れる者があつたら胡魔化して屋敷へ這入り込みモウ明日が討入りだから能く案内を見て置きたいと思つたが、大きに目的が外れました。二三度四五度吉良家の廻りをグルグルやつて居ります。内に屋敷前に髪結床があつて髪を結ぶのを待つて居た若衆が、甲斐勝見や那の竹屋の野郎は狐にでも化されたと見へる先刻から一つ所をグルグル廻つて竹屋と怒

大 高 源 吾

鳴つて居やアがる何所か外へ往つたら又買手もあるのに一つ所をグルグル廻つて居るのは狐に化されたんだせ。乙、然ふさ可笑な竹屋じゃアねエか。といふ聲がチラと耳へ這入りました。怪しまれては成らんと思ひ道を替へて兩國橋の方へ参りました。是は源吾の失策でありまして家を轉して三年の間は竹を入れぬといふ事が三世相か何かにありました。銀治橋内から屋敷替に成つて松坂町へ来たのは今年で二年目でおります。から煤掃竹の必用はございませぬ弘法にも筆の誤り竹賣りとは好い所へ氣が注ぎました。が流石の源吾も其邊までは心注かなかつたものと見ゆる。今兩國の東詰めまでやつて來ると筑波下しの寒風はヒヒと頬の肉を千切つて持つて行くばかり今朝より催したる雪模様は終に泣出してチラチラ白い物がやつて参りました。人々は自ら早速に成る中に源吾は風流の男故兩國橋の中央にて關干

大 高 源 吾

へ竹を立掛け寒さに撓す景色を見て居りましたのは流石子葉でございませす所へ廣小路の方からやつて参りました人は頭巾を被り黒縮緬の紋附の羽織足駄穿きでございまして傘は未だ差す程には降つて居りませんから是をつぼめて左に提げ丁度源吾の休んで居る前へ来る途端に生憎源吾の被つて居りました手拭がヒラリと北風の爲に飛びました其顔を見て大いに驚き「是は暫く子葉先生ではござらぬか抑も此人は何者ぞといふに其頃茅場町の植木店に住ひをいたして居りました寶井其角といふ人やす迄は無けれども芭蕉十哲の一人で姓を板本とすして寛文の元年七月十七日に生れました全株板本は母方の姓でございまして竹下と云ひ又竹内とすし父は江州堅田の人で醫者だとすすこととでございませす幼名を源助と云ひ又源慶と改め神田お玉ヶ池に暫く居りまして芭蕉の門に入り俳名を蝶舎と云つて後其角と改めまし

四

大 高 源 吾

たが其後文字を改めて其角と號し、お玉ヶ池から照降町に移轉し夫から芝の神明前へ移つた時は時は元祿三年十二月で其角の吟んだ句に
鼠にもいつか馴染んで冬籠り
一日明けて四年の春に成りました時に
行きあひの松も片附き飾り竹
と吟じました元祿十一年芝濱に轉じて庭に澤山の竹を植へ有竹居と名乗りました其後翌年に成つて現今の茅場町の植木店へ移しましたので餘ッ程轉宅好きのお方と見へますさて寶井其角に聲を掛けられて大高源吾は少々赤面の躰でございまして誠に耻つて顔を揚げ源是は宗匠意外な所では面會をいたして誠に耻入りました次第でございませす其如何なされたエ子葉先生此度は何んともすさうやうも無いお家の大變其後播州赤穂城をお引

五

大 高 源 吾

渡されたるも承知いたしました。が就ては俳友の嵐雪杉風等も先生必ず江戸へお出で、あらう其時には俳友であるから何うか今日の事も相談を致さうと申して居りました。僕も實はお待ち申して居つたに何故か尋ね下さらぬは恨みでござるを子葉先生源誠にはハヤ恐れ人りました。主家の不祥は身の不祥とやらで斯様な姿に相成りました。俳友を訪れるのもうら耻かしく終に江戸表にありながら貴所もお尋ね申さず今日測らすも橋上には面會をいたし厚き言葉に預かつて満足に存じました。其尊公にも似合しからぬ其仰せ風流は赤貧を樂む杯といふ事は常々存じてありながら姿が悪いから尋ねないの零落れた姿を見せたく無いのといふのは夫は俗人の申すことだ何うか今晩はお尋ね下さい。風流のお話しでもいたしませう。源有難ふ存じます。殊に由ると何うかも知れませぬ。其是非お尋ね下さい。然し風流は相變らぬ

大 高 源 吾

でござらうな。源夫はモウ如何に零落いたしました。風流ばかりは棄たく無いと兼ての心願でございます。其ア、夫は結構なる思召し……」と悠々なもので雪の降る中に兩人は平氣で話しを爲て居りました。が其角はやがて鼻紙と墨斗を取出してすうと認め、其大高氏附をお願ひ下さい。と差出した源吾が受取つて見ると、年の瀬や水の流れと人の身はとございます。暫く考ひて氷りたる筆を紙めて、あした待たるゝその寶船と書て差出し、源宗匠必は他言は無用に願ひたい。其角は熟くくとも見て居りました。が其人は貧しく成ると斯ふも卑しく成るものか源吾の姿が氣の毒だから年の瀬やと前句を附けたのにあした待たるゝ其寶船とは何事だ恐らくは一夜明けたら寶船で

大 高 源 吾

も賣うといふ心であらうと思つたが左あらぬ体で 其いつものな
がら恐れ入りました 源甚だ出来でございます何うか宗匠お
情けには呉れくも他言は無用に願ひたい 其如何にも承知
いたしましたと話して居たが何しろ源吾の姿が寒さうでグスカ
ら自分の着て居た黒縮緬のゴリくするやうな紋附を剥いで
其失禮ながら……と源吾に若せてやりました源吾は辭退もせず
其羽織へ手を通しまして下に締て居た汚ない紐をしめて 源宗
匠思召し厚き下され物辱け無く頂戴いたします 其失禮だが何
うぞ風を引かぬやうに若て往つて下さい 源有難ふ存じます宗
匠行丈けも揃つたお羽織似合ひましたかなエ、と笑つた
様子に其角は腹の中で「失禮な男があるものだ人に物を貰つて
笑うといふのは斯ふも卑しく成るものか」と思ひました 源宗匠
大分雪も強く成つた様子はお別れをいたします 其餘も寒い

大 高 源 吾

から何所ぞと一盞汲みたいと存じますが 源夫は預りとして
置きませう私も未だ是から方々商ひをして歩きませんと此幕が
押附きません何れ庵へお尋ね申し其砌り四方山のお話しを仕り
ませう 其左様か其お言葉にお任せ下さう若しお出での日が定
まつたら鳥渡前日に湯沙汰を願ひたい嵐雪杉風も呼んで置きま
す 源夫は有難ふ存じます人間が定まりますと申上げるやうい
たします行丈けの揃つたお羽織を頂戴いたしは思は忘却いたし
ませぬエへ、左様なら……と黒縮緬の羽織を惜氣も無く雪
に濡れて居る竹を撥へて兩國の方へとンく馳けて行く様子を
見送つて居た其角が獨り言 其ハテナ那の男は少ししたじれて居
やア爲ないか貧乏をして居るのだから一旦着た羽織も疊んで懐
中へでも入れべきに嬉しいとも思わないで竹を撥いで往つて仕
舞つた其上に行丈けも揃つたお羽織エへ、とは何んの事だ

大 高 源 吾

餘ッ程氣の沈着いた人であつたが主家が断絶したので氣が狂つたど見へる……ア、失策た那の羽織は向柳原の松浦様の御隠居から二三日前に拜領をした御紋附だ是は飛んだ事をした那樣いふ塩梅では質に置くか屑屋に賣つて仕舞うか分つたものじやア無い類の少ない御紋附が古着屋へ吊しんほうにでも出た所を家中にでも見られた日には飛んだ失策が出来る是は幸を向柳原の松浦様へ往つては隠居にお目通りを爲て委細のお話をす上げて置もうと心注た其角は其儘跡戻りを爲て淺草向柳原の杉浦邸へスタ〜やいて來たは隠居も相手慾やに思召して居る所へ其角が見へたどありすから至極お喜びなされ直ぐにお目通り仰せ付けられました 隠サア此方へ參つて手を温めたが好からう其恐れ入りました いたつてもは隠居にはは壯健に渡らせられ大慶至極に存じ奉ります 隠イヤ若い内は寒さにはめげんであつたが

大 高 源 吾

年を取つては不可ん氣ばかりでな身躰が承知せん其方も達者で好いな 其恐れ入りました有難き御言葉に預りました 隠今日は何んど思つて見へられた 其少々は御掛けすして置かねば成らぬことがあつて其故罷り出でましてございます 隠ハテ届ける事何んじやな 其外の事ではございませぬ先日拜領仰せ付けられました黒縮緬の紋附のお羽織を失ひましてございます此段は届けず上げます 隠ア、遣はした羽織を無くなしたといふか大事無い都合に依つて曲げたのか 其是は恐れ入ります能く曲げる杯といふ言葉を存じで在せられますな 隠ハ、有るやうで無いのは金子じやとすすが其方も餘程不手廻りだど見へるな 其重ね〜恐れ入りますは隠居は何うして曲げるの不手廻りだのといふ事を存じて居らせられますな 隠過日手が家來から委しく承つて夫からは云つて見たくて成らん餘り毎々いふ

大 高 源 吾

ので重役に見付かり予も叱られた上に教へて呉れた家來は永の
暇に成り掛つたアハ、其然し斯様な下賤な事は存じ身
にて仰せられませぬ方がお宜しう存じます曲げたのではないの
で實は俳優に遣はしました 隠ウム俳優と申して何者に遣はし
た 其ハイ大高子葉と申す者に遣はしました 隠子葉……ハテ
ナ予は子葉と申す者を知らんな 其イエは存じ無いことはござ
いません先年百韻の節に文台を勤めました浅野内匠頭來家大高
源吾忠雄と申す者でございます 隠ア、那の予が退ましたし武士も
であるど云つた那れか 其傍意でございます然し退ましたし武士も
主家斷絶の後には見る影も無く零落れ果て今日杯は雪中に煤拂の
竹を商ふて居りました私も見兼ねて兩國橋の上で彼に羽織を與
へました跡にて考ひますれば拜領のお羽織氣が注ぎましてお届
けに出ました 隠ウム夫は能くいたした朋友の零落れしを見て

大 高 源 吾

顔を背けて行くやうな其角なら出入りは止める袖に涙の落る時
こそ親友の心は知れる寒さを忘れて友に盡すとは有難い心得と
や寝め遣はずぞ 其恐れ入り奉ります 隠然し其方と子葉の事
であるから附合いでもいたしたであらうな 其左様で……橋上
に行んで筆を染めましたお慰み迄に此處に入れませと懐中より
最前の鼻紙を取出してお目に掛けました松浦老公取上げ玉ひて
隠ウム一年の瀬や水の流れと人の身は……是は其角其方がいた
したな 其左様で 隠あした待たる、其寶船……ウム、是は大
高の脇であるか 其左様でございます 隠其角其方に此意味が
分るか 其去れば…… 隠分るまいな今日は何日か 其十三日
でございます 隠ウムあした待る、其寶船左もあらん俳諧に
ては一步芭蕉も譲る其方であるが武士の志しは知れまい羽織を
遣わした時に子葉が何んとかやしたであらう 其如何にも……

大 高 源 吾

宗匠是は内々に願ひたいと呉れくも頼みまして羽織を着て
行丈けの揃つたお羽織エへ、と笑ひました 隠ナニ笑つたか
其左様で 隠笑うであらう羽織の行丈けも合つてエへ、とば
能く笑つた其角手だから好いが必ず内々でといふのを猥りに人
に見せては成らん予よ予であるから構はんと仰しやつたなり奥
へお道入りに成りました跡に残つた資井其角は料理も出まし
たが箸も取らないで松浦のお屋敷を出たが借て天下に名を残す
程の人は何所か違ひます侍の心は其方には分るまい能う笑つた
といふお言葉が氣に掛りましたして其儘用達にも行かず歸宅する積
りでサク／＼やつて來ましたがモウ餘程雪も積つて居る寒さも
恐れず下を向きながら 其今日は何日ヒや十三日あした待る、
其寶船行丈けも揃つて其お羽織へエへ、と獨り言を云ひなが
ら歩いて來たから往來の者は驚きました 甲ライ／＼ 那の坊主

千四

大 高 源 吾

は氣が違つて居やがる獨言を云ひながらニヤ／＼笑つて居やア
がる薄氣味の悪い坊主じやねエか 乙大方氣でも違つて居る
んだらうと往來の悪口も其方退けで夫でも何うやら道を間違ひ
ずに植木店の宅へ歸つて参りました女房や弟子が出迎ひまして
妻お歸り遊ばせ囃雪でお困りなさいましたらう 其今日は何日
だへ 妻十三日ですよ 其ウムー十三日か行丈けの揃つたお羽
織リエへ、 妻アレサ何うなさいましたの確乎なさいました
よ何うかなさいましたんですか 角武士の心は俳諧師には知れ
めエウムー残念じやア無いか 妻何が残念なのです然ふ云へば
貴郎お羽織を何うなすつた 其お羽織の行丈けが揃つてエへ、
、 妻アレ又お始めなすつたよ角山やお前お醫者の様へ往つ
て來てお呉れ家の宗匠が少し取逆せたやうですから直ぐお見舞
下さいつて…… 其イヤ／＼ 醫者にやア及ばん氣は確かだから

十五

大 高 源 吾

今日は何日………ウムー十三日だつて家内の者も斯ふ云有様です
 から盡く心配いたして居りましたがお酒を出した其今日は飲
 みたく無い飯も喰べたく無いと其儘に床へ這入つたが矢張り口
 癖に今日は何日だ十三日行丈けの揃つたお羽織をへ、どやつ
 て居る内に夜も明けました其角は朝飯も喰べを顔も洗はず其
 今日は何日だい 妻十四日でございますよ 其チャ一日違つた
 せ 妻一ト晩お休みなされば一日違ふじやありませんか 其成
 程夫に違ひ無い 妻サア湯豆腐が出来ましたから嗽ひでもなす
 つて一抔お上んなすつたら好うございませう昨夜から一つこと
 ばかり云つてお出でなさるが何うなすつたのであります 其
 イヤ乃公の考ひの解せね内は飯も喰はん酒も飲まねエア雪
 隠へでも往つて考ひて来やうよ………と雪隠へ這入りました
 其今日は何日だへ十四日かこゝで少し和場が違つたが行丈けも

大 高 源 吾

揃つたお羽織へ、 妻何んですね 貴郎小供じやあるまい
 し小便所で然んな事を仰しやる人がありますか 其黙つて居な
 ば内々だと便所へ這入つて考ひて居りました折節トンくと門
 を叩く者があります其角の妻は夫へ立出でまして 妻誰方で……
 チャ嵐風先生杉風宗匠 嵐イヤお早うございませう兄貴は起きな
 すつたかいお支度が宜しくは此所から直ぐに伊同道をやす朝寝
 の兄貴だから此雪で多分は寐て居るだらうと思つたが約束だか
 らお寄りすした 妻チャ左様でございませうか先づチヨイとお
 上んなすつて良人は起きて居るおす 嵐ナニ起きて居るニ流石
 は風流人だ平生は寝坊でも此雪を眺めやう爲の朝起きか恐れ入
 つた 妻イエ然ふじやございません何うも良人は昨日から少
 し氣が變に成りまして家中心配をして居ります所……… 嵐ナ
 ニ氣が………然んな事はあるまい 妻イエ本當で 西ウムー、夫り

大 高 源 吾

やア妙だ那の優人が気が……マ兎も角も上がらうと兩人は座敷へ通りました嵐マ何ういふ様子で……妻昨日他所から歸つて参りました夫からの事で今日は何日だ十三日行丈けの揃つたお羽織へ……ど一つ事はかりずして居ります夫に羽織を無くおなして参りました嵐可笑な事があるものだと云つて居る所へ雪隠から出て参りました其ヤアは兩所併揃ひで嵐妻君確かですよ妻イエ中々確かでございますいません其今日は何日だへ妻アレ始めました嵐兄貴何うしたんだい確乎爲なくつちやア行かないせ其ナニは内々だよ行丈けの揃つたお羽織でへ……妻那れでござえます嵐何うしたんだい其何うしても大きにお世話だ今日は何日だへ杉困つたなア夫では今日のお約束の屋敷へは行かれまいなア其屋敷へなんで行く奴があるものか杉夫でも本所の屋敷じやアお前が今日は百酌の巻上げ文

大 高 源 吾

台を勤めるのを樂みにして居るのだ其全体今日は何所へ行く日だつけ嵐兄貴忘れたかい松坂町の本多孫太郎様さ其松坂町の本多といふのは何所の所だつけな嵐笑談じやア無いホラ去年假治橋からお屋敷替に成つた松の廊下一件の吉良上野の隣りだア是を聞いて其角はハタと膝を打つて其ア、讀めた漸う事が分つた吉良の隣りなら出掛けるよ嵐往つて呉れるかい其行く……が今日は何日だつけ嵐又始めたせ十四日さ其昨日は嵐十四日の前の日なら十三日さ其ツムあした待たるゝ其實船分つた成程俳諧如きに武士の志しは分らなかつた内々に違エないお目に掛つてお詫をしやう嵐兄貴のいふことは少つとも分らねエ本當に何うかして居るせ其何うも爲やしない俳諧師に侍の志しが分るものかおさみやア、一腹が減つた一杯飲んで本所へ行く何を愚圖々々して居る昨夜から飯も喰わせねエ

で 妻、貴郎が喰へないのじやアありませんか 其乃公が喰はね
 エと云つても無理にでも喰わせるが好いサア両君も一口飲ん
 で然ふして出掛けやう 嵐、ナイ杉風餘程沈着いたやうだ 杉本
 當にさ来た時は何うしやうと思つた 其、何んでも好い此仔細
 は跡で分る決して私の氣が可笑く成つた云ふのじや無い鬼も角
 も……と爰で三人は酒を飲み食事も済せて流石に風流を以て世
 を渡るだけあつて雪の降るのを事どもせず本所松坂町の本多孫
 太郎殿お屋敷へ出て来ました多くの文人墨客が集り其角が文台
 といふのを勤めましてさて百韻の巻上げも済み夫からお料理が
 出て夜に入つてお開きに成りましたが皆立歸る中に其角のみは
 取分け愛顧せられて居る故跡に残つて殿の酒のお相手などを
 いたして居りました固より一物ありますから充分には馳走にな
 づて 其借ては前未だ雪は濡みませぬ且つ大層酩酊仕りました

から今宵は一泊を願ひます殿ア、易いことじやコレ其角を
 泊めて遣はせ其角の好む處へ寝かしてやれ 其、恐れながら私は
 往來の見へます所が宜しうございます 殿、當屋敷に往來の見
 へるやうな座敷は無い門番所か物見だ 其、門番と同居は困り
 ますが夫ではお物見に願ひたい 殿、妙な好みがあるものじや此
 寒氣なり雪なりで寒うて寐られまいぞ 其、夫が風流でございま
 す是非お物見を拜借いたします 殿、然らば其方の勝手にいた
 したら好からうとお許しが出来ましたから其角は悦んでお物見に
 寐ることになりました平生火の氣の無い風のスー、来る所で
 すから寐られ、ばこそ蒲團を被つて坊主頭を縮めて居ります所
 へ彼是れ夜の九ツとも覺しき頭門をドゥ、と鼓く者あり其角
 は借こそ聞いて居ると「吾々れ播州赤穂城主淺野内匠頭長矩
 家來當時浪人共にて候が主人の存意を次て修羅の忘執を晴さん

大 高 源 吾

やア妙だ那の優人が気が……マ兎も角も上がらうと兩人は座敷へ通りました。嵐、マ何ういふ様子で……妻、昨日他所から歸つて参りました。夫からの事で今日は何日だ十三日行丈けの揃つたお羽織へ……ど一つ事はかりずして居ります。夫に羽織を無くなして参りました。嵐、可笑な事があるものだと云つて居る所へ雪隠から出て参りました。其、ヤアは兩所涉揃ひで。嵐、妻君確かです。妻、イエ中々確かでございませぬ。其、今日は何日だへ。妻、アレ始めました。嵐、兄貴何うしたんだい。確乎爲なくつちやア行かないぜ。其、ナニは内々だよ。行丈けの揃つたお羽織で……妻、那れでござてます。嵐、何うしたんだい。其、何うしても大さにお世話だ。今日は何日だへ。杉、困つたな。夫では今日のお約束の屋敷へは行かれまいな。其、屋敷へなんで行く奴があるのか。杉、夫でも本所の屋敷じやアお前が今日は百韻の巻上げ文

大 高 源 吾

台を勤めるのを樂みにして居るのだ。其、全体今日は何所へ行く日だつて。嵐、兄貴忘れたかい。松坂町の本多孫太郎様さ。其、松坂町の本多といふのは何所の所だつてな。嵐、笑談じやア無いホラ。去年假治橋からお屋敷替に成つた松の廊下一件の吉良上野の隣りだ。ア是を聞いて其角はハタと膝を打つて。其、ア、讀めた漸う事が分つた。吉良の隣りなら出掛けるよ。嵐、往つて呉れるかい。其、行く……が今日は何日だつて。嵐、又始めたせ。十四日さ。其、昨日は。嵐、十四日の前の日なら十三日さ。其、ツムあした待たるゝ。其實船分つた成程俳諧如きに武士の志しは分らなかつた内々に違エないお目に掛つてお詫をしやう。嵐、兄貴のいふことは少つとも分らね。本當に何うかして居るせ。其、何うも爲やしない。俳諧師に侍の志しが分るものか。おさみやア、一腹が減つた一杯飲んで本所へ行く何を慮圖をやして居る。昨夜から飯も喰わせね。エ

大 高 源 吾

で 妻貴郎が喰べないのじやアありませんか 其乃公が喰はね
エと云つても無理にでも喰わせるが好いサア両君も一ト口飲ん
で然ふして出掛けやう 嵐ナイ杉風餘程沈着いたやうだ 杉本
當にさ来た時は何うしやうと思つた 其、何んでも好い此仔細
は跡で分る決して私の氣が可笑く成つたと云ふのじや無い鬼も角
も……と愛で三人は酒を飲み食事も済ませて流石に風流を以て世
を渡るだけあつて雪の降るのを事どもせず本所松坂町の本多孫
太郎殿お屋敷へ出て来ました多くの文人墨客が集り其角が文台
といふのを勤めましてさて百符の巻上げも済み夫からお料理が
出て夜に入つてお開きに成りましたが皆立歸る中に其角のみは
取分け愛顧せられて居る故跡に残つて殿の酒のお相手などを
いたして居りました固より一物ありますから充分に馳走にな
つて 其借ては前未だ雪は濁みませぬ且つ大層酷酒仕りました

大 高 源 吾

から今宵は一泊を願ひます 殿ア、易いことじやコレ其角を
泊めて遣はせ其角の好む處へ寝かしてやれ 其恐れながら私は
往來の見へます所が宜しうございます 殿當屋敷に往來の見
へるやうな座敷は無い門番所か物見だ 其、門番と同居は困り
ますが夫ではお物見に願ひたい 殿妙な好みがあるものじや此
寒氣なり雪なりで寒うて寐られまいぞ 其夫が風流でございま
す是非お物見を拜借いたします 殿然らば其方の勝手にいた
したら好からうとお許しが出ましたから其角は悦んでお物見に
寐ることに成りました平生火の氣の無い風のスー、来る所で
すから寐られ、ばこそ蒲團を被つて坊主頭を縮めて居ります所
へ彼是れ夜の九ツとも覺しき頃門をドゥ、と鼓く者あり其角
は借こそと聞いて居ると「吾々れ播州赤穂城主淺野内匠頭長矩
家來當時浪人共に候が主人の存意を次て修羅の忘執を晴さん

大 高 源 吾

爲今宵は隣家吉良殿へ推参いたし候侍の情けによつて御見逃しに預りたく上野之介殿を討奉らば外々へは手向ひは仕らせ火の元等心注げ可申候此段頭大石内藏之助の命に由つてお届けす吾々は中村勘助大高高吾とすする者は門番より此儀を重役へ御届け下されたいと言置て立去らんと爲た時に最前よりお物見に待構ひたる寶井其角窓を開いてスツクと顔を出だし其大高氏アイヤ子葉殿……と呼ばれた大高源吾は斯る場合に何者か我侘名を呼ぶと差備向いたが夜目に確とは分りません源唯方でござる其寶井其角でござる昨日は兩國の橋上に於て己れの愚なるより意外の失禮忠義の爲に身を忍ばするとは露知らず羽織などを差上げ却つて尊公の物笑ひを招き赤面いたしました跡にて心注ぎ失禮をお詫いたさん其爲に此所にお待ちました幸ひにしては面會をいたしたは未だ拙輩の運の盡きざる所謹んでお詫

大 高 源 吾

すす大高氏源是は宗匠は戀なるお言葉を頂き却つて手前が恐れ入りました又昨日は結構なるお羽織を頂戴いたし其節の無禮は偏に御勘辨折角のお志しを無にしたかと思へば拙者が甚だ相濟ん暇もあらば改めてお詫に参上いたすべきだが夫も叶はぬ今日の場合悪からず其如何いたしましてイザ去らば子葉氏御身が首途を祝ふうて我雪と思へば輕ろし傘の上と其角が大聲に吟みました源吾も續いて日思や忽ち碎く厚さふり其お美事でござる大高氏此場にもでも風流をお察なきは大高莞爾と打笑みまして源辱けのうござる宗匠何れ千万年の後冥土に於ては詫申す……と馳出しました後姿を雪明りに見送

大 高 源 吾

り 其ア、一 天晴なる忠臣かな今宵に限り此大雪雪はそゝと
讀む故へ大願成就は疑ひなしと大ひに喜び尙如何あらんかと塞
さも厭はず吉良上野之介の首級を上げて引上げまで見て居りま
したるが手を叩いて打悦び尙雪中を泉岳寺まで参つて大高に面會
を遂げ互ひに胸を開いて別れましたとす事實に大高源吾の忠
心は萬世不撓然るに此人の親類に至極不忠の人が一人あります
夫は誰だと言ふと小山田庄左衛門と云ふ者で此人は大高の父の
弟小山田家に養子に参つて小山田喜内の子でありまして然らば
源吾とは従兄弟同士の中然るに淺野家へ對して不忠を止なく働
き源吾に幾分か傷を付けました尤も是は餘り世間の人は知らな
いが泉岳寺庫裡雜談といへる本に出て居りますから源吾の親戚
であると言ふ所の縁を以て本編に加へて演じます

大 高 源 吾

第 二 席

茲に播州赤穂の城主五万三千石淺野内匠頭長矩公殿中は乃傷よ
り上は大石内藏之助を始め寺坂吉左衛門に至るまで一同親子兄
弟に別れ妻に別れ子に別れ千辛万勞をして翌年の十二月十四日
本所松坂町吉良公お屋敷へ罷り出で首尾好く主君の恨みを晴
し一人として忠ならざるは無い義士とまで云はれて二百年の今
日まで立派に名が残つて居る其中に一人小山田庄左衛門のみ不
義不忠の名を残して是は何うしても拭ふことが出来なす斯くま
でに至つたのは何んであるかといふと酒でございます酒といふ
ものは飲むべし飲むべしからずといふが飲んで好い物ではあるが
然しながら用を抱へて居ては飲むべからざるものにて如何なる
方でも大事を抱へて居る人は餘り酒を飲むといふと其が爲に手

大 高 源 吾

落ちがあつて不都合なふともある大石内蔵之助義雄殿が目を注
けて居らしつたのは小山田庄左衛門友重といふ神刀流の達人で
なかく、家中評判の好い若者内匠頭様は在世の折柄は若侍衆が
は前休に於て色々立會をする内では先づ一二と指を折られた
人學問も能く出来なざる従つて家中の人の評判が好い親の喜内
といふ方がある是も至つて忠義な人ではあるが弓組の頭を勤め
て居り足輕共には至つて手當が宜しい然るに内匠頭様は果てに
成る半年ばかり前に或る狩場にて轉び夫から此方へ身躰が懸る
い愛に於て隠居をして妻は固より早く没つて一人で入つしやる
のだから不自由ではあるが先づ右の手が利くからさゝなかな家
に一人で住つて庄左衛門の仕送りを受けて居りました然る所へ
は家の一件赤穂離散するもに成つて喜内は庄左衛門に忠義の
道を言利け又大石殿にも能く俸の身の上をお願いひやして親は露

大 高 源 吾

ほども不忠な心は無い義雄か委細承知をして内蔵庄左衛門は
酒を飲むと何事も忘れて仕舞う酒の爲には勤めを欠くこともあ
れば家中の若侍と口論をいたす事もある其が爲に間違ひをした
事も二三度あるから必ず酒をば飲むなよと意見をして其が爲に
大石内蔵之助殿は自分の傍へお置きなすつた庄左衛門ハツタリ
と酒を止めて仕舞つて一滴の酒も飲まない親の喜内は俸に別れ
て「乃公はもう此世になき人の數に入つたと思へ必ず共に其方
は大事に望んで親の事ばし思ひて未練の働さをいたすと人に笑
わるゝぞ本懐を達する節には人に指で、天晴れな者である人
の手本にされるやうにいたせよと能く言ひ聞かして別れを告げ
て少々の蓄ひもあるお金子配分の時には相當に頂戴もいたした
し旁々するから江戸表に参り深川の六間堀里俗膳の櫓といふ所
がある其裏屋を借りて細い煙りを立つて身躰は羸るくとも米の

大 高 源 吾

料位い右の手が利かつしやるものだに由つて色々な事をなすつて世の中を渡つて居る庄左衛門友重は大石内蔵之助殿の傍に居て万事に心を注げて居る彌々事成つて大石は江戸表に下向をする庄左衛門は先へ江戸へ下つて親の喜内にも逢ひハヤ仇討も近々といふ事に成つて安心をいたして石町の鐘突新道の内蔵の住ひへ同居いたして居りました十二月十四日が打入りの當日十三日の事でございませうが内蔵庄左衛門殿 庄ハイ 内蔵失禮ながら貴殿は神刀流をお使ひなさるが刀がナト長い長い得物を使い付けた人が俄かに短かいのを使つてエのは使ひ惜いか知らないが明日は豫め座敷の内の勝負が多い然らば得物が長いと天井へ突へて誠に不自由を生ずる是は相州秋廣の鍛ひられた切味も試してある巾着もあるし失禮ながら之は貴郎に内蔵が進上をいたす今更いふには及ばんがモウ明日の夜が此世の別れお恨みを

大 高 源 吾

晴さうと又は討漏さうと命は無いと極つて居るコトヤモウ衆ての覺悟此世にある内今一度お父上にお逢ひなすつて能うこそ別れを告げてお出でなさい貴郎の魂いの道入つて居るお刀はお父上に差上げて逆まながらは回向を願うやうにするが宜しい就ては浪々の儀であつては持合せも乏しくお成りなすつたらう此末貴郎が亡なつたりと云へば誰に掛らうといふ人の無いお父上だ金子を五十兩是を養老金として差上げて下さい或は受取らぬか知れないが失禮ながら内蔵が申しましたと云つてお納めに成るやうに上げて下さい今晩はお泊りなすつて今生の別れだ苦しく無いから明日泉岳寺へ集まらば好い何うか其お積りで十四日の夜は目出度く本懐を遂げる父上にも宜しく申してお悦びの顔を見ては安心をなすつてお出でなさいました夫から其歸りに本所深川に浪宅を構ひて居る人々の宅へお寄り下さい夫は何んである

犬 高 源 吾

かといふと各々方の内に決てお困りの方も無からうけれども又
中には不手廻りで近所に借財等が聊かづゝでもあつて立派に仇
を討つてしまつた跡で赤穂の浪人に如何程貸があつて那れを返
して貰ひなかつた損を掛けられた杯といふことがあるも死して
の後の耻辱其所で皆さんの所へお問合せなすつて金子入用の方
へはお望みたけお差置き下さい愛に金子が二百兩をさいますか
ら 庄委細長りました 内蔵返すゝもお父上に能く別を告げ
てお出であるやうに……と大石内蔵之助の深切庄左衛門は又今
更の如く有難涙に暮れて二百五十兩の金子を懐中いたし新たに
貰ひ受けたる秋廣を帯し己れの今まで差して居つた刀は是を布
へ包んで挨拶を告げて石町三丁目の住ひを出て正平少少過ぐる
頃六間堀の父が浪宅へやつて來ました 庄は免下さいまし 喜
ハイ誰方や 庄拙者でございませう門口をがらりと開けて互ひは

犬 高 源 吾

見交す顔と顔 喜イヤこれば 殿か能くお出でだすアゝ
此方へ…… 庄ハイは免下さいましと上に昇がる一別以來の挨拶
が済んだ時に父は甲斐しく茶杯を入れて呉れる 喜借て
俸大府は當江戸表へ下向なされし由過日一寸三村次郎右衛門
殿に面會をして其事を聞き宜しく申し上げて下されお頼み申し
て置たが私もお目通りに行くんだけれども此通りの半身不随で
居るから却つてお目通りに參つたら先方では迷惑だらうと遠慮
を申し居た何ういたした那の一條は 庄お悦び下さいまし
彌々明十四日芝高輪の泉岳寺に於て三回期のは法事お取越し
法養をいたしまして明夜吉良家へ亂入といふ事に豫め取極りま
してございませう親子夫婦の間柄にても他言は無用といふ誓ひな
れど大石殿もお父上には差問ひ無いから此事やしては安心をさ
せるとの仰せ 喜イヤ夫りやア結構な芽出度いと佛檀より冷光

大 高 源 吾

院様の位牌を取出だし前へ飾つて手を合して涙を流して伏拜
んで居る 喜伴明日はな乃公と其方の二人前の働きをして呉れ
んければ不可ん予好いか吉良殿の首級は他人に上げられるな汝
が兩人前の働きをして上げて呉れる 庄長りました大石殿は何
から何までお心注いで入つしやる方私しの流義は神刀流でござい
ますからナト刀が長うございます尤も自分でも少しく得物が長
いとは思つて居りましたが差馴れたる刀でガスから差して居り
ました然るに大石氏が明夜は座敷の勝負が多いから得物が長い
と餘つて不便を生ずると不可ないと思つて秋廣作の一刀を内殿
殿が下さいますして只今までの差料は親人に對して差上げ逆まな
がらば回向を願うやうにと斯うやして万事にお心添でございま
す是は存じの手前が今まで差しました祐定の一刀手前と思召
しまして逆さまの傍回向を願ひたう存じます 喜イヤ實に辱け

大 高 源 吾

無い内殿之助殿の思召し何から何までお届きなすつて實に有難
ふ存じますす伴此刀は其方と思ふて恐ろに回向いたすであらう
庄ハイ有難う存じます夫から内殿殿の仰せには頼みの伴が死ね
ば差當たり便りに思ふは金子何うか是を進せて呉れるやうにと
仰せられて五十金を私しにを渡し下さいましたお受取りを願ひ
たう存じます 喜ウム一夫は庄左衛門は断りやさうモウ乃公は
幾年生きられるものじやア無い然ふいふとお前が力らを落すか
も知れないが皆さんが本懐を達して目出度いア、一は満足をな
すつたらう冷光院様が……と思へば乃公はモウ今まで張詰めた
心の弓は挫けて長くは保たぬ積りで居る手前が安心の爲に見せ
てやると向ふにある古藪箭の蓋を拂つて纏纏に包んだ金子を三
十兩 喜浪人はしても赤穂浪人が野クレ死をしたといわれては
亡き傍主君様のお耻と心得て此通り死金は三十兩持つて居る三

大 高 源 吾

十兩あれば二年や三年は居食をして居ても大丈夫だ決て苦勞を
して呉れないやう其方討入りの其節に一人の親が生きて居る乃
公が死んだら親の看病をする者が無からう杯と働きながら考ひ
ては成らんぞよ太刀先きが鈍れば自然と功は他人に奪われる乃
公は死んだものと思つて呉れ孝行な弊ゆへに夫だけ心に掛ける
であらうと私の方では討入りの夜が思ひやられて成らん忠義を
美事に立てやうとすれば親に對して孝道の立て惜い廉もある親
に孝道を立てやうとすれば主人へ對して忠義を立て惜い廉もある
忠孝兩道は全からざるものであるとは古人もいはれてあるか
ら是非無いものだ必づく親の事は思はんで明晩は天晴れの働
きをやつて呉れよ 庄有難ふ存じます 喜金子は誓つて受取ら
ない五十兩の事は置いて金子は一錢も受取れない皆さん夫れ
配當の金子を頂戴して困る方は無からうが中には困る方が無い

大 高 源 吾

どはいはれん然ふいふ人に對して不都合の無いやうにして頂
たい是はお前が内藏殿に持歸つて能う上げて呉れよ 庄有難
ふ存じます 喜就てはな庄左衛門夢の覺めたやうに乃公は思ふ
が旦那のお達者の時分には酒を飲んでア庄左衛門が又々論を
した庄左衛門が酒の上にて斯ふいふことをしたと云はれる度毎
に乃公は瘦せるやうだつた旦那が昨年の三月殿中は及傷よりバ
ツタリとを止めて其方が今日に至るまで盃だに手に取つて呉れ
なかつたのは實以て庄左衛門其方の心中悦ばしく思ふ親が甘や
かしては濟んが何事を棄置ても酒より外に樂みの無い其方私は
斯ふいふ身軀に成つても固より好む酒だから一合位いは飲んで
居る一合買つた酒が那所にあるが此世の名残りだ此の世の樂み
の爲納め置た一合の酒を其方に少々飲ましてやらう好きなもの
だに由つて是を此世の名残りとしろ好いか 庄ハイ有難ふ存じ

大 高 源 吾

ます買つてあつた一合の次酒を親父の喜内が盃に三ッばかり踏
は庄左衛門が馳走に預りましたが親父から許しを受けて飲んだ
酒實に旨い思ひ出だせば全で飲まづに居りましたのだから
ア、一久振りで甘露の味がいたしました是といふのも父上の
教訓お心を注げての下され物有難ふ存じます左様ならお父上
機嫌好う逆まながら帰向を願ひます大石殿を始めとして一
同の靈魂を……喜如何にも承知いたしましたり明日は立派に仇討
つて泉岳寺へ花々しく引揚ぐる体を是非拜見したい立派な
をいたして呉れよ庄左衛門頼むぞよ 庄ハイ左様たれば……と
門口をパツタリと鎖して小山田喜内はツツとばかりに涙に暮れ
たが眞實の親子是が千万年の永く別れかと思へば流石侍も愛着
心に迫られて前後不覺の体であります庄左衛門は左様ならばと
ニク足三足前の方へと立出でましたがワツといふ聲が耳へ遣入

大 高 源 吾

ると勇氣鈍り 庄借は父上は明日の晩仇討といふ事を聞玉ひて
お悦びとは云ひながら又一方にはお歎きなさるか思ひ切りの好
い父だに由つて首尾好う仇を討つたと聞玉ふたら咽喉でも突い
て死んで仕舞わつしやることかア、お氣の毒な事であると思
はづ知らず門口へ立戻つて門口から隙見をせんとした時にガラ
リと明けて顔と顔 喜悴此方へ上がれコレ親となり子となつて
我子が彌々死際といふ時だ悲しければ泣きもする涙も流すさて
其方は見下げ果てた奴だな此喜内が能く言聞けたでは
無いか親に心を殘せば忠義は立てられぬものである承知したと
云ひ置きながら親父が泣いたからとすして奈是立戻つて門口か
ら家の様子を見やうとした此親父に氣が残り働きに鈍いやうな
事があつては後の世の人に面目無い親の身と思つて呉れて辱け
無いと禮を云ひたいが却つて汝が親に氣を注げて呉れるのは不

大 高 源 吾

孝である其方是へ上つて腹を切れ然すれば吾れが汝の首を提げ
て大石殿の所へ至り此者は親に心を残して充分忠義を立てるこ
との出来なま言ひ甲斐なき者故に私しが腹を切らせました是に
ては勘辨下さいと大石殿へお詫をするサア腹を切れ 庄父上は
免………全くは免下されたい仰せは道理でございまして最早お
父上は此世にないと諦めます去れば………とばかり喜内はドンク
別れを告げて出て参りました路次の外へ出たのを見てドツカリ
尻餅を突いて喜ア、一小言はいふやうなもの、然し孝行の悴
だなア乃公が豆満足で居るなれば安心もして行けるだらうが半
身不随の身軀モウ思ひ残すことは無いと何んな事をするかと思
つて乃公の様子を見て呉れるのは孝行者………コレ悴私が悪いの
だから勘辨して呉れ那の位いに叱つて置かなけりやア貴様の爲
に成らんから無理と知りつゝ小言もいふたのだ悪しく思つて呉

大 高 源 吾

れるなよと喜内は涙を流して冷光院の位牌を拜し歎きの内に
悦んで居られました小山田喜内は其晩は立つて翌十四日に成る
と大した雪だ雪はそゞどいふ文字是れ會稽の耻辱を雪ぐ今日
ア、一目出度いと念佛を唱へて居る最早日は暮れたし 喜何時
に討入りをするか豫め九ツ頃といふのだがモウ是れ九ツに近い
肉が動いて寝られない公乃が満足なれば一緒に往つて五人や七
人妨げをする奴は切拂うのだが残念な事だワイとバリ、齒を
喰縛つて吉良殿の御首級を上げるは今頃であうと冷光院様にお
手向け申上げる所の燈明線の煙りの絶間もなく念佛を唱い
てマッショリともしいなで居た夜の明方 喜ア、一何うしたかな
芽出度く恨みを晴して呉れたか怪我過ちでもあつたか無事に忠
義を立て、呉れ、ば好いが………討死をしなされた人もあるかは
知らんけれども首尾好う吉良殿の首は上げたか知らん何しろ上

大 高 源 吾

こじよと心中少しく訝かしく考ひました所へ矢田五郎左衛門が
差掛つたから 喜、矢田氏、五郎左衛門、願はて 五、イヤこれ
は喜内殿が 喜、ハイ、悴は如何いたしましてございませう前夜大
傷でも受けましたか乃至は大石氏のお使ひでも受けて何れかへ
参られましたか 五、喜内殿其許は忠義なお人、子息は親に似ぬ
不忠者今までは左の人とは心得つに居つたが見限り果てた庄左
衛門彼は十三日の日に内藏之助殿から二百兩の金子を預り相州
秋廣のお刀を頂戴して内藏殿の深切なるお言葉があつて、身
の所へ暇乞をしながら浪士の面々に金子を別けて與へるやうに
といふ事で十三日に出たつ切り歸つて来ない察するに金子に眼
が暗んで二百兩の金子を以て逐電いたしたものと見へる定めし
は身の所へも能う行きやアしまい犬にも劣つた畜生侍……とイヤ
は身に對しては失禮だが言葉に果た致し方言葉替すも汚らわし

大 高 源 吾

い討入りに来ない者が討死をする道理もなしお使ひに遣られる
道理も無いア、犬侍とは庄左衛門の事にあてると悪口をいふた
儘に往き過ぎるアツと云つて小山田喜内はドウとばかり後への
方へ倒れただ 喜、ア、一情けない悴は如何いたしたのであらう
十三日に那れ程いふてやつたのに金子に眼が暗んで命を捨てる
のが嫌になりしか去るにても其様な悴ではあらざりしが成程義
黨の方々と共に事をせなければ犬侍といわれても畜生といわれ
ても仕方が無い又夫で無くとも金子に眼が暗に成つて命が惜く
なつたと云われても仕方が無い残念な事をしたワイ那の時彼の
心中が分つたなら一刀兩断に切つて棄て此汚名は着まいるのを
……と涙にうるんだ眼を看破つて立上がらんとした時に一番跡
から来たのは赤垣源藏喜内を見るより例の元氣者ツカと傍
ひ寄つて 源、コリヤア小山田氏 喜、赤垣氏、身等に顔を合すは

大 高 源 吾

喜内面目無ふござる 源は尤もは子息の有様をお聞なされたら
無拙者共に面を合すは面伏せならんとは云へ喜内殿は身は美く
しき心の侍なる事は拙者等は存じて居る親子一ツに成つて不忠
不義を働いたものとは思はぬ何んにも知らるは子息に逢わんと
是へお出でたに相違あるまいは氣の毒千萬でござる……源藏心
中をお察しやすと流石は赤垣源藏だけに老の身を幾分か慰めん
どの心であります喜内面を上げまして 喜辱け無うござる源藏
殿多くある朋友も今と成つては言葉を掛けて呉れる者も無之さ
に拙者へ對しては身のみ斯の如く仰せらるゝは辱けのうござる
死すとも喜内忘れば置かぬ 源イヤ必ず 短慮召さるな此
上は草を分けても子息の行衛を堅義し兩斷に切つて亡君のほ
前へ備ひるこそ幾分かの忠義は忘れなざるな喜内どのイサ去ら
ばとばかり槍を振りで行過ぎました後姿を見送つて両手を合し

大 高 源 吾

たる小山田喜内ヨロ／＼杖を力らに六間堀の家へ歸つて
参りましたが冷光殿様へは回向をいたして遺書を認め腹十文字
に割て相果てました。
とは知らぬ近所の者は十六日の朝に成つても平生早起きの喜内
が戸を明けないガタンどもスタンどもいはないわら隣り近所の
者が 甲「妙じやアねエかお隣りの浪人様は……昨日確かに歸
つてお出でなすつたつけが 女「ア、歸つてお出でなすつたよ夫
から何所へも出てお出でなすつた氣色も無いが 甲「だつて音も
しねエじやアねエか 乙「明けて見るか 女「明けて見やうたつて
明きやアしないよお隣りの旦那お隣りの旦那……返事をしない
よ明けてお呉れよ 甲「厄介じやアねエかと漸う戸を押明けて道
入つて見ると屏風が立つて居る其中を差覗いたが 甲「アツハ、
大變……タ、タ、大變だ」と馳出して大家の家へ飛込んで

大 高 源 吾

甲「大家さん、大變でございます。大家さん、大何うしたんだい。甲「何うしたつて……」

前播州赤穂城主浅野内匠頭家臣

大 高 源 吾

私儀主家滅亡の後當所に浪宅相構ひ居り候所此度據るなく切腹仕候其次第は悴小山田庄左衛門とす者大石内藏之助殿と

小山田喜内

五十六歳

五十一

大 高 源 吾

て粗茶の一杯も召上がり下さるやうに願上候色々只今までは
厚情を蒙り候は禮等も上げべくなれど死出の旅路を取急ぎ
候まゝこれにて筆止め申候

町内彦家主様
御長屋衆

元祿十五年十二月十五日

右

小山田喜内

と違筆に認めてございます喫落した町役人家 主ア、忠義なお
方だど威せぬ者はありません長屋の者は大悦びにて 甲大屋さ
ん何しろ三十三両といふ金子があつて見れば葬式を出して長屋
へ餞頭を配つたつて大丈夫だ寺の方は百ヶ日の間掛合つて夫も
成丈け安く餘つた金子は長屋の者へ貸して下さい何うでせう前

大 高 源 吾

借りに三両ばかりお貸しなすつて此暮が追付きませんから 大
馬鹿ア云へ然んなことがあるもんか其所で名主大家から改めて
町内奉行へは検視を願ひ申検視役人別紙を披見いたしますと
書附を以て奉願上候

故播州赤穂城主淺野内匠頭長矩家來

小山田喜内

拙者伴小山田庄左衛門前城代大石内藏之助外一統と申合せ
主君内匠頭の恨みを晴し奉らん心得にて愈々昨十四日夜一
同吉良公屋敷へ推參致すべき手組の所伴庄左衛門のみは何故
か同夜何れに罷り越し候か行衛知れを畜生にも劣りし始末一
統の方々に申すも無之は是に由つて切腹仕候伴儀は手を以て
親を殺さず候へ共親殺し同様の者に有之り候間日本國中津々
浦々に至るまで役所様の力らを以ては尋ね下され申候

りの上親殺しの重罪に奉願上候以上

小山田喜内

五十四

元祿十五年十二月十五日

此町奉行役人様申中

涙に暮れて役人衆に不惑に思召し死骸は家主へ下渡しと成り
是は手厚く葬むるに成りましが町奉行所に於ては兎も角も
不義不孝の者故庄左衛門の行衛を盡く殿重に尋ねに相成りま
したが何れ如何なる所に參つて居るか開は次回に委しく辨じ升

第二席

借て親を及に伏せしめ君には不忠朋友に信義を欠き天地容れざ
る大罪を犯せし庄左衛門は何れへ行きしか後に至つて大石内藏
之助殿が細川家の浮家敷にて是を承はり内蔵憎いのは小山田

大 高 源 吾

大 高 源 吾

庄左衛門といふ者だ不惑なは小山田喜内彼は實に立派な者だ借
ひらくは身躰さへ好かつたなら喜内は天晴我黨中に漏れざりし
ものを……と細川様へ切腹の當日親しくお頼みに成つて内蔵
お手敷乍ら小山田庄左衛門なる者をお召捕被下度とお頼みなす
つた位いだ此庄左衛門友重が當日十四日に間に合わなかつたの
は是は如何なる次第であるかどやしますと小山田喜内の宅を出
て那方此方と歩きました深川の十万坪に小野寺十内といふ人が
筆跡の指南をして居る此小野寺十内の所へ行うといふので深川
仲町通りへ差掛つて來ると毛利大主が砂村の下屋敷へお成りに
成る所で往來が止つて居るから突切つて行く理由にも行かない
立つて居ると往來の片邊りに丁子風呂と云ふ行燈が出て居る
庄ハ、ア風呂屋があるな待つて居る間に一ト風呂浴びて行くと
ガラリと格子を明けて庄許せよ女入つしやいまし十六ばか

五十五

大 高 源 吾

り成る仇氣無い姉さんが 女入つしやいましてお二階へお上
り遊ばして下さいまし 庄イヤ風呂に一ツ道入たいんだが……
女ハイ唯今お風呂の加減を見ますでございましてから何うか少々
お待ち遊ばして其間だお二階へお上がり遊ばして下さいまし
庄然ふか允せよと二階へ上がる大きな蒲團を持つて来て 女是
をお敷きなすつて下さいまし 庄イヤ何うも氣の毒千万と云つ
て居る所へ持つて来たのが青磁の急須へ鷹の爪か何か入れて青
磁の茶碗九谷の菓子器へ練羊羹が五ツ切ればかり 女召上がり
まし 庄イヤ何うも然ふ手當てをされちやア困る 女何ういた
しまして只今お風呂を直きに上ますでございましていふ所へ今
度出て来たのは三十八九に成る太つた年増 女旦那さま能く入
しつて下さいました唯今直きにお湯の加減を見ますから嘸お寒
かたつてございませう 庄何うも寒いなア 女は意でございま

大 高 源 吾

すチリン 庄表へ飛脚屋が通るやうだが何んだらうと
思つて居る内に十八ばかりに成る色の白い新造が重たげに持つ
て上つた廣蓋小皿が五ツばかり割箸が五膳チヨイとテツカ味噌
にお香の物盃洗にお湯が道入つて居るチリン といふのは盃
洗の中で猪口が泳いだ音なんだ 女お待遠様でございまして 庄
コレ 女乃公は酒を飲み上つたのじやア無い此家は湯屋で
は無いのか 女アレ願望けて入つしやるよ何んですねエ 庄イヤ
ヤ全く知らんのだ乃公は酒を飲みに来たのじやア無いたつて一
ト口位い召上つたつて罰も當らないじやありませんかサ切望召
上つて下さいましお盃だけでもお取り遊ばして……狐にでも化
されたやうで庄左衛門には一向理由が分りませぬ 殿ハ、ア湯
屋で酒を出す能くアノ播州の赤穂に居た時分に話しがあつたが
攝州有馬の湯治場には湯女といふ者がある湯女といふ者は湯屋

大 高 源 吾

で女が客人の機嫌を結ば色々な事もある江戸でも矢張り其類ひの湯屋があるのか知らんア、仕方が無いモウ此世で何をしやうといふ事も無いのだから今日明日二日の命だ明夜に至れば或は死出三途の旅へ赴かなければ成らんのだ然らば此世に於ては樂みも出来ない身一杯の酒を飲んで此世の名残りだ金子は懐中に持合せもあるし大石様から預かつた金子を使はなくても一兩や二兩使やア立派な驕りの出来る話しヨ、勿体無いとは思つたけれど此世の名残りといふ量見に成つて盃を擧げて一杯の盃を飲み干しました今年の三月から酒は一滴も飲まない奴が今一杯の酒を飲むと腸へキユ一と染みて來た斯ふいふ人の腹の中に世帯を持つた酒の虫は安心をして居る所へ昨年一一滴も飲まないんだから酒の虫が相談をして居る 甲何うだマア此節のやうに酒が切目に成つて仕舞つちやア困つちまう乃公達には干上

大 高 源 吾

つて仕舞うが何うしたもんだらう 乙然ふよ此頃は乃公達の禁物の牡丹餅なんぞが時々降りて來やアがつて弱つて仕舞つたといふ所へ酒がキユ一と降りて來たから 甲「サウ旨エ」と先刻冷酒を飲んで少し威勢の好い所へ今度には好い煙の奴が降りて來たから「モツト飲め」と咽喉の所へ虫が手を出して騒ぐ五杯が八杯……お燭が段々に來るお肴が色々に來る燈火が点て仕舞た最前よりビユ一といふ北風の雪催ひはムラ……降つて來て寒さは一層に加わつた所へ二十六七に成る白粉ツ氣の無い濱しの嶋田に結つた色の白い姐さんが上つて來て 女阿母さん今晚は…… 婆「ヤ和女は苦勞様ですなエ寒かつたでせう 女随分お寒いね美イちやんは苦勞さま 美「ヤ姐さんお出なさいまし 女お金ちやんは苦勞様…… 貴郎入つしやいまし 貴の初音を囀るが如き美しくしい聲にて「貴郎入つしやいまし」と

大 高 源 吾

いわれたから少しく酒が腐へ染みた庄左衛門 庄、イヤ能くお出
で……と云ひながら顔を見る 「ハテナ見たことのある女だ」庄
左衛門は暫く見て居る彼の女も入つしやいまして一言庄左衛門
の顔をシツと見て居たハテナと互ひに胸の内 一同アノ姐さん
お頼りします姐さんお頼みしますと敵妓が来たから是に任し
て皆外の者は降りて往つて仕舞つた 女旦那貴郎は此所へ入つ
しやるやうな方じやア無いが貴郎は播州ですぬ何うも貴郎知て
る方に違ひ無いんですが弓組のお頭小山田様のひ子息庄左衛門
様では入つしやいませんか 庄、ウム夫じやアお前は服部甚兵衛
の娘の花か 花如何にも然ふでありますするハテナ妙な所でお目に
掛つたじやありませんか斯んな家へは出で遊ばすお方では無い
が能く似て入つしやると思ひて居たのでございませぬ 庄、乃公も
斯んな所へ来る女では無いがと思つて居たのだと申して「お前

大 高 源 吾

は斯ふ云ふ所に居るのである 花、私しよりは貴郎は何うして
箇様な所へ 庄、私かな餘り寒いから湯に道入らうと思つて此所
へ通り掛つたから道入つたスルト二階へ上がれといふから上る
と色々な物を持つて来たからア、飛んだ所へ参つた少々散財を
すれば夫で済むのだと諦めて居た所へお前がやつて来たんだが
花、然ふですか此所の家は貴郎お客様が何んですよお金子を無く
して仕舞わない内はお返ししやいたしませぬ 庄、ホ、ウ夫じ
やア八門通甲の中へ道入つたやうなもんだ大變な家へ来らま
たなア全体花は前は何うして斯んな所へ…… 花、私しはソラ昨
年の一件からお金子配分を頂戴して播州赤穂を去つて江戸へ参
つたのでございませぬお父さんと阿母さんは此深川雲光寺門前へ
の八番といふ長屋に居るんでございませぬ 庄、成程 花、私しも親
父の厄介に成つて居ります内に親父が大病で仕やうがございませ

大 高 源 吾

せぬ昨年お長屋の人に頼められて此金猫屋さんでお金子を三十
両お借り申して夫から此所の家へ招かれては三十両のお金子を
返金する積りで此所へ通つて居るんでございますお蔭でお父
さんの身躰は快く成りましたがなかにお金子は返せませぬ誠
にお恥かしいお話ですが……然ふして貴郎のお父さまは何う
なさいましたか、庄親父は深川の膳の縁といふ所に一人で居る
花左様でございますか、庄夫じゃア何んだなお前と阿母と三人
暮しか三十両の金子は其儘して居るのか、花其内如何程か減つ
て居りますのですか、庄ア、然ふか自分の娘のやうに父喜内が
可愛がつた弓組の足輕服部甚兵衛の娘花自分と一緒に兄弟のや
うに朝に晩に来て居たのだから何となく懐かしい甚兵衛も心の
直な者であれば花の母といふのも誠に量見が好い爰に於て庄左
衛門が考ひたにはコリやア此花を三十両で身受けをして面目無

大 高 源 吾

いが父へと下すつた五十両の金子を以てお花を身受けして雲光
院の甚兵衛の世帯を仕まはせ親子三人を父喜内の許へやつて置
けば起居不自由の父も安樂に暮せる私が冥土へ往つても心残り
は少しも無いと云ふ量見が付いたから、庄然ふか夫じなア親父
か阿母何方でも好いから呼べお前の身躰の浮くやうにしてやら
う其上で雲光院の世帯を仕舞つて膳の縁の父喜内の許へ一緒に
成つて呉れる私の父は半身不随お前が世話をして呉れば父も
娘に世話に成つて居るやうで心持ちが好からう、花ハイ有難う
存じます然うして下されば私しも浮み上がりまするといふ所へ
お待遠様でございますと又肴が来る誂ひもしない肴をド、
持つて来る遠國侍で金子を持つて居るだらうからドシ、使は
せやうといふ家中の者の考ひ庄左衛門はへ、レケに酔つて仕舞
つたお花の父甚兵衛を迎ひに遣つたが出て来ない女供が来て三

大 高 源 吾

味線を曳くやら踊るやらで大變な騒ぎ其夜はお花と共に一室へ
グッスリ寝込み酒に本心も誘けたか怪しい夢を結んで寝込みま
した誠や憤むべきは酒恐るべきは女看客諸君はお覺ひはござい
ますまいがお若い方が主人なり父なりの金子を懐子へ入れて歩
く酒の氣さへ無い時は遊んで見たい杯といふ氣は無くとも腹が
減つた何所かでは飯を喰べやうと料理屋へ押上がる隣りで旨さ
うに飲んで居るから飯ばかりじやア氣が利かないと一合飲ひ何
んだか物足りないからモウ一合好いハ機嫌に成つて仕舞つては
飯を喰べて其所を出るとサア遊意勃々として禁じ難く儘よチヨ
いと遊んで行かうといふので吉原へなり洲崎へなり這入る先方で
はチヨイとは遊ばせない懐中に持つて居さうだなど見ると旨く
梶を取つて面白く遊ばせる終其夜は歸り損れて翌朝に成るいよ
歸れなく成つて又一日流連す今度は斯ふ成ると自棄と兩人

大 高 源 吾

連れて三日四日と明まけすから金子は無くなつて来る家へはモ
ウ歸れずといふ事に成つて終には奉公人なら訴へられるとかほ
子息なら親に心配は掛けるとかして方向を過つことに成ります
る去れば酒は決して途中三途で用を抱へて飲むものでは無い飲
みたかつたら夜分お宅で一合づゝも召上がれ斯ふや上げる伊
舟兵庫あたりのお方に毆打られるかも知れないが却説グッスリ
寝て明日の朝になると始めて庄左衛門は正氣に返つた 庄ア、
、勿体至極も無いと考ひて居る所へ 女お手水をお使へなさい
まし顔を洗う先づ一杯と持つて來たのが蛤鍋に焼海苔 庄イヤ
モウ酒は飲まない 女ア然う仰しやいませんで……と旨く勤
める爰は當人が酒を好むのが餘義無い爰で一ト口でも飲まな
つたらば左様な間違ひも無かつたのだらうけれども天命とでも
申しませうか終一ト口と酒が始まる

大 高 源 吾

幾海苔や度胸のすはる朝直し

といふ句がある 庄今日は何うしても斯ふしても泉岳寺へ行か
にやア成らん泉岳寺から今夜が夜討我命も今日を限りの事であ
る……コリヤ花や来ないなア其方の父は 花イエ昨晚親父は當
家へ参りましたが貴郎が餘り能くは寝なつて入つしやつたらお
起し申すもお氣の毒と立歸りましてございます 庄然ふかやれ
夫は残念起して呉れりやア好いのに然らば案内をせ私私
お前の家へ行ろ 花だつて餘り見苦しい所でございますから
庄見苦しいも大事無い老人を又呼ぶてエのは此雪で難澁だから
……と勘定をメバツといたして出て行く仲町通りから木場を廻
つて雲光寺門前への八番といふ長屋へ来て見るとイヤ汚ないワ
両側にスーッと長屋が並んで居りまして多くは其日家業の
貧乏人でダスから此雪で家業にも出られず一軒の家へ大勢集つ

大 高 源 吾

て雪を眺めながらこぼして居る 甲何うだマア本當に乃公の家
の河童野郎は女だらうもんならモウ十五だ來年あたりは何所へ
茶屋女に賣飛ばしたつて一ト資本には有付くんだ其奴ウお前丹
波の國から生擒りました荒熊つてエやうな面をしやアがつて青
ッばなをクッ垂らしやアがつて阿父錢イ呉れど斯ふ吐しやアが
る 乙然んなことを云ふが男だよ何時まで親の臍を嚙つて居る
ものせやアねエ今に阿父を立すこしにして呉れるだらう 甲何
んだか的に成つたものじやアねエマンマと首尾好く干殺すか
何んだか知れやアしねエ……ヤア來た……見なせエ奥の浪
人者の那の娘を見ねエな何んか勤番侍を引張り込んで來たウン
と持つて居ると見て金子エ取つちまをうてんだだから女の子が
好いてんだ羨しいじやアねエか那の勤番侍が金子を取られて仕
舞つて喧嘩でも始めて呉れりやア好い皆んなで仲人をして仲人

大 高 源 吾

は時の氏神といふから納りを付けて如何程かの禮に預らうてん
だが喧嘩でもして呉れりやア好いなア 乙本當だ此寒いの酒
も飲むことも出来ねエ喧嘩でもすりやア旨く飲めるが……と此
社會は縁な事は考ひては居ない甚兵衛夫婦は昨日から娘が色々
お世話に成つた禮を述べて「何うか宜しく願ひたい 庄如何に
も承知いたしたと其所へ金子を並べるお肴が来る酒が来て又酒
宴が始まつた小山田庄左衛門は今朝より酒の酔があるから又々
是に倒れてグッスりと一ト寝入り丁度夕七ツ頃不圖目が覺めて
ビツクツとして 庄イヤ大きに遅くなつた然らば甚兵衛およしお
花最前渡した那の金子で金猫屋の方の始末を付けて六間堀の父
の家に至り喜内の看病を頼み入る明日からでも參つて呉れよ頼
むぞよと立上つた時に 花貴郎信相變へて何所へ入つしやるの
でございませす 庄イヤ 據る無い所へ行なけりやアならんか

大 高 源 吾

ら立歸る 甚何か貴郎娘が此意に入らんことでもいたしまして
のお腹立でございませすか夫なれば年取つた夫婦が誰んでお説を
いたします 庄イヤ 決して然ふいふ次第では無い是非々々行
かなけりやア成らぬ所があるのだから…… 甚先づ少々お待ち
なすつて下さいませし何れへお出でに成るかは存じませんが……
と甚兵衛夫婦が留めるお花は泣いて留める 花貴郎昨晚のお言葉
に養にしてやるごま仰しやつて置きながら何んな御用がある
かは存じませんが妻ならお明しなすつたつて宜しいではありま
せんか切望私だけ「斯ふいふ用があるぞ仰しやつて下さい
まし 庄然ふいたしては居られぬと三人を突退けて表へ飛出し
路次を馳出でんといたしました待ちに待つたる長屋の連中祭文
語りに見世物の口上謂乃至は羅宇屋納豆屋「ソラ始まつた」
浪人者の家で喧嘩が始まつたサア女房も子供も惣出だ」と一

大 高 源 吾

同に十四五人狭い路次の口へズーッと屈んで 甲「ハイ長屋の者
惣出で此通りお詫を上げますから御辨を願ひたら存じます
甚兵衛さん夫婦に代つて私共がお詫を上げますと頭を並べて
居るから飛越して出て行くことが出侍ない 庄「イヤ〜 決して怒
つたのでは無いと言譯けを云つてると後からは服部甚兵衛親子
三人が袖に縫つて詫をする嫌なく甚兵衛の宅へ立戻るといふ
と腹が然ふ云つたか酒が来る肴がドン〜 来る其所へドヤ〜
押掛けて来た長屋の者が 甲「エ、先づ旦那様手前共のお仲裁を
お聞届け下さいまして有難ふ存じますとメラリと並んで 甲「甚
兵衛さん盃を出して下さいモット無けりやア茶碗で好いと手に
取上げて 甲「先づお一ツ……先づお一ツと献すから庄左衛門ガ
ブ〜 然んだ堪らないからゴロりと横に成る 甚「どうも
皆さん有難ふ存じましたお庇陰様で旦那が漸う納りまして何れ

大 高 源 吾

お禮に…… 甲「イエナニ軒別へ一々お禮は面倒だらうと存じ
まして今向ふの魚金と高崎屋へ然ふ云つてやりまして一軒毎に
酒を二升鰯を一枚つゝ頂きましたとさいます御勘定は旦那から
願ひます大きに有難ふございましたと歸つて行く世の中に非道
い奴がありやアあるもので自分の方で勝手に禮物を眺ひて取る
奴も無いもので 甲「何うだい有難エヒやアねエか是だけ酒があ
らうもんなら當分寒さが渡げるお茶もあるモット喧嘩はねエか
知らん 乙「一ッ此方で始めやうか 甲「お前杯が喧嘩を始めたつ
て百にも成らねエ旨いことがあるものだと人の不祥を悦ぶ是等
の心情は實感笑の次第でございます
右庄左衛門友重といふ人は臆は腐つたか何んなことをしても夫
婦親子の中でも漏すまいといふ約束ゆへ謂ひないから他で怒つ
たのだと思つたのは無理は無いが譬へ是等の人が何んと思ふと

大 高 源 吾

も己れの心さへ腐らなかつたら切拂つて馳出しても差支ひ無い
のだ全く不忠をしやうといふ心得では無かつたのだが一夜の契
りを結んだお花に愛情が残つて彼が泣いて止めたばかりに勇氣
が鈍り大事の前に心意を翻したものでありませう翌十五日の朝
まだきに成つて酔が冷め眼が覺めたが何うすることも出来ない
唯茫然として座つて居る所へ今赤穂の浪士が吉良の屋敷から仇
討をして引上げて來る所だと世間では鼎の沸くが如き噂さ 庄
借は首尾好う吉良上野之介を討取りしか嘸滂一同は満足の事
であらう夫に引替へて此身は一日二日の内に酒を被つたとは言
ひながら此始末ア、面目無いモウ存命へては居られない腹を切
つて相果てやうと一刀を逆手に取直しました時に固より長屋立
ての廣からぬ家お花はビツクリして其手に縋り 花アレマア貴
郎何をなさるんでございますと涙を流しての意見爰に庄左衛門

大 高 源 吾

が又々死を思ひ止まるの一件……

第 三 席

大丈夫も女の黒髪にはつなぎ留められるものでありまして彌々
切迫つまつて腹を切らうとした時にお花が其手に縋つて 花マ
ア、お待ち遊ばせ何ういふ譯で貴郎は腹をお断りなさるので
ございますと聞かれた時に 庄花實はお前の耳にも運入つたら
うが吾等は大石氏と共に吉良上野之介を討つて旦那のお恨みを
晴し奉る積りであつた過日測らる其方に逢ひ夫から此方酒に飲
潰れて前後正躰もなく昨日參れば未だ間に逢ふたのだが終長屋
の者や其方に引留められた儘寝過して仕舞つて此始末討入りは
昨夜の九ツ見よ此の騒ぎを……我等と共に誓ひし人々は首尾好
う仇討を済して今引上ぐるといふ實に面目無いから腹を切つて

大 高 源 吾

九牛一毛は冥土へ参つて主君に申譯けをいたさんと思ふ其手を
放して呉れ 花一應は道理でございます………けれども貴郎お
一人敵を討たないのじやアありませぬ五万三千石の家の中の方が
残らず揃つて敵討をして貴郎ばかりが討たぬといふではありま
すまい多くある武士の中に四十餘人がお討ちなされた討てば忠
義といはれませうが討たないからといふて不忠といふでもあ
りますまい外に討たない方も澤山あるものですから夫を思ふて
存命へて居て下さいまし是非死ぬと仰しやるなれば私共親子三
人をお殺しなすつて然ふして後に切腹をなすつて下さい妾は
貴郎に任した此身躰夫人と思ふ貴郎に先立れ何樂みがありませ
うと放れ難なき萬かつら見棄難くぞ相見へました庄左衛門は腕
拱いて黙然と無言で扣いて居りましたが爰で思ひ切つて死ぬば
未だ武士らしい所もありましたのだが餘までお花の色香に迷つ

大 高 源 吾

た小山田斯ふいはれて見れば死ぬるにも死なれず屹度心を取直
して「イヤ然ふいはれて見れば仕方が無い成ほど然ふは今更死
んでも庄左衛門は忠義だと褒めて呉れる者はあるまい死は思ひ
止まらうが就ては親父は如何いたしたらう中々堅い親父ゆへ自
分で行くことは思ひも寄らずお前の阿父さんをやつて夫となく
尋ねて見て呉れるやうに 花「畏りました」とお花が甚兵衛をやつ
て六間堀を尋ねさせて見ると喜内は腹を切つて死んで仕舞つた
今此檢視が来て大變な騒ぎといふから甚兵衛は驚いて立歸つて
来て此事をいふ庄左衛門愈々良心に恥入つて 庄君には不忠又
親には此上もない不孝朋友に信義を欠き生きて甲斐ないと思
つたが借て今と成つてはモウ外に術も無い聞く所に由れば父の
遺書に由つてお上で庄左衛門をお尋ねなすつて居るといふ事だ
から爰に於て頭を圓め内藏之助から預かつた金子も二百兩ある

大 高 源 吾

し自分の金子も少しはございますから深川の三角屋敷「只今の
龜住町をいふので今だに三角に成つて居るといふ所へ丁度醫者
様の居た家で小奇麗の家がある此家を借込んで山田三成と名を
付けて本道外科の醫者の看板を掛世の中を送る事に成りました
當今は醫術開業は中々容易で無いが其頃は傷寒論の一冊も讀め
ば勝手に醫者は出来たもの思へば斯ふいふ山田三成の如きに托
す病人は因果なもので死ぬか生きるか分らない其翌年に至つて
お花の父甚兵衛は病死をした女房はお芳と云つてお花の阿母ア
は連者で傍に面倒を見て居る女中を仕ひ扱いたして暮し向きに
少しも心配は無いが朋友は皆忠死した中に己れのみ約束を破つ
て斯ふして居ては濟ないと思へば寢ても夢で責められ其胸の苦
しみは一通りならないが去るものは日々に疎しとやらすしまし
て追々々其念も薄らぎ今日と暮し明日と送つて居りました夫婦

大 高 源 吾

の中に男の子が出来て庄太郎と名を付ける間も無く又懐妊を
て女の子が生れて二人の子持に成つてお醫者様をして居るから
と云つたつて六ヶ敷い庄左衛門の三成の腕では逆も直らないの
でございます病家とても大して無く大石さまから預かつた金子
が二百両ありますから是を高利にして貸付けて其利息を取つて
世渡りをして居る葛根湯だの五靈散だの五靈湯だの然ふいふ分
つて居る賣藥のやうな物を買つて来て然ふして腹が痛いといふ
病人には熊の膽に黒願子を飲ませる癪が起つたと云へば熊の膽
を飲ませる常にいふには三乃公には六ヶ敷い病人は直せない
ヒを持つて居るから下手人には取られねエ有難いもんだといふ
厄介な醫者様其代り金病だ困ると云へば利息を取つて金子は貸
てやる丁度十二月十四日晝少し過ぎからチラ／＼降つて来た雪
は日が暮れては彌々激しく四ツの頃には往來も止まつて寂莫と

大 高 源 吾

いたして居りますお花と向ふ前で酒を飲んで居た三成 三お花
大層降つてるじやアねエか 花本統に非道く積りましたねエ貴
郎 三ウム…………… 花庄坊も今年三ッに成りますよ 三ア、然ふ
だなア早いものだなア 花思ひ出しても貴郎凄然とするじやア
ございませんか丁度三年跡の今月の今日でしたよ貴郎が那の時
にお出でなすつて死んで仕舞やア斯んな可愛い子供は生れます
まいねエ貴郎が十五日の朝に切腹して死のうといふのをお止め
すしてお止んなすつたから斯ふいふ子供も兩人出来て何うで
す可愛らしい顔をして寝て居るじやございませんか 三如何に
も那の時に一時は武士氣質で腹を切つて死んで仕舞やア今日の
結構は見ることは出来ない其當座は胸を痛めて苦勞にしたが餘
炎が冷めて仕舞へば結局此方が世の中が樂だ大石内蔵之助殿か
ら頂いた相州秋廣の刀は揚身にして斯ふやつて差料として内蔵

大 高 源 吾

之助殿から預かつた二百兩の金子があつたし自分の善へも如何
程かあつたから斯ふして此所へ家を持ち金貸をして居て今じや
ア利息も大分溜つて子が子を産んで惣金五百兩はあるだらう何
不足なく暮しをしてお前の親父も立派に野邊の送りもしてやつ
たしだがモウ然んな話しは爲ねエが好い 花本統でございます
よけれども貴郎私しは命の恩人でせう私しがお止めしされたれば
もが命もおあんなさるんです夫を思つても私しを粗末にしちや
ア成りませんよ 三忘れやアしないよお前のいふ事は何んでも
聞く 花然ふですかじやア私しを芝居へやつて下さいよ木挽町
が大層好いてエますから 三ア、遣つてやらう 花縮緬の羽織
を一枚買つて下さいな 三ウム買つてやるよ火鉢の向ふ前でヒ
ソソ話しをしながら酒を飲んで居る先づ人間此が無上の樂み
でありませうスルト次の間でポツリと音が聞へるから 三

大 高 源 吾

田舎の奴てエものは本統にお花始末が悪いやアノ越後から出て
来た堅物夜るまで薬研を下して居やアがる此所へ呼んで呉んね
エ 花ハア直助や直や 直ヘエー 花チヨイど此所へお出で
直ヘエ 三直助何んだつて夜るまで玄關で薬を切つて居るんだ
い 直だつてハア旦那の仰しやるには暇ベエあつた時は薬を切
れど云つたから切つて居りましたんで 三直骨を折つて薬を切
つてるのは好いけれども然ふ何うも夜るまで薬をボツ〜切ら
れちや困る表向き醫者の看板は掛つたつて病人がウソとあるし
やアねエヒやアねエか那所の醫者様は薬を切つて居たこともね
エと云われるのが極りが悪いから玄關でボツ〜 看板に切つて
りやア好いんだ一日に少しづつ切つてれば夫で好い夫を何うも
然ふ夜るまで一生懸命に成られちやア困る乃公は醫者は下だけ
れども病人が来れば何うも私しには直せませんとはいわねエ上

大 高 源 吾

手らしい面をして正道に盛殺すやうな悪い薬は盛らねエが下手
人に取りられつこねエ薬を盛つて居る乃公は金子を貸して利息を
取るのが商賈だ金の病人なら美事に直しても遣らう又屋根から
落ちて骨を挫いたとか何んどかいへば柔術の心得があるから探
和らげてもやらうけれども普通の病氣じやア六ヶ敷いんだサア
寝ろモウ四ツも過ぎて居る此所に酒が三合ばかり餘つて居
るから是を以て往つて飲んで寝ろ何んな氣紛れか又此雪で病ひ
が起つて急に來て呉れると夜中に迎ひが來ねエものでもねエ其
時は起きて供をして往つて呉れヨウ早く寝な 直何うもハア有
難ふ存じますでございませ 花直やお前お燭を付けて上げやう
か 直イエナニお燭には及びません井へ注て冷酒でグーッとか
つちまいますから左様ならお休みなせへやしモウは隠居さまは
お休みに成りやしたか 花ア、寝たよ 直左様で私しも夫じや

大 高 源 吾

は免を蒙りますすべしお休みなせへましと直助は自分の寝間へ
這入つて三合の酒をグツと飲んで寝に就きましたがお花と三成
は酒を飲み矢張り是れも好い心持になつて寝込みました夜の丑
三ツ共覺しき頃のことです果せるかなトン／＼と門を叩く男
エ、お頼やします直助の所へ寝て居た直助が直ハア誰方で
男仲町の山形屋から参りましたとさいます直ハア今明けやす
立關のマイラ戸を明けて出て来たが直山形屋様でございますか
と潜り戸を明けると若い男が山形屋といふ提灯を付けて雪の中
に立つて居る直男病人でがすか男エ、甚だ恐れ入りますが
唯今直新造が急に差込みが来て誠に難避いたして居ります先生
に一寸お見舞やして頂きたく存じます直ハア然ふですか少し
待つて居せつせエやし今先生に聞いて上げるから……先生さま
三直助何んだ直仲町の山形屋さまの直新造様が癪が起つて胸

大 高 源 吾

が痛くつて仕様がねエ直ぐ見舞つて貰ひてエと申して参りや
したが見舞つて遣りますか悉く見舞つてヲツ殺すと不可ね
エからと云つて断つてやりますか三馬鹿なことをやせ醫者と
して頼みに来たものを殺すと不可ねエからと断わる奴があるも
のか只今お見舞ひやすと斯ふ云つて返せ一寸往つてやるから直
頼むぞ那方の家は大家だ斯ふいふ時に往つて置きやア大晦日の
禮はタンマリだ寒いが頼むぞ直宜しうございませ……お若衆
多苦勞さまでございませ唯今先生が見舞つしやるさうで……
若何分お頼みますと云つて若い者は立歸りましたお襦袢に
お胸お召着物を三枚ナミ帯をスツカリ締め羽織を召してパツ
ナをお穿きなすつてお足袋長合羽を着て長合羽の裾の方と紐で
締める今は外套といふ者が流行るが昔しは長合羽をお召しなさ
るお武士様方でも下の方の袋束の紐をチャンと締めて居たもの

大 高 源 吾

で(寒い時には)誠にそれは不自由のものだ然して雪の夜だから頭巾をお召しなすつて蛇の目の笠を取つて玄關へ出ると直助はモウ支度が出来て居る下へ襦袢を着込み布子を着てグルリと尻を捲つて空ッ臍に草鞋穿き先生の下駄を直して薬箱を擔ぎ立つて居る 直何うもハア旦那様は苦勞様でがすなア 三イヤ直助宵にスツカリ言當て、仕舞つたは苦勞たなア 直ナニは苦勞なことはねエ給金貰つて晝間は遊んで居るだもの當然エのこんだ花直やは苦勞だねエ 直何ういたしまして……往つて参りやす下女のお怒も出て来て 松旦那様往つて入つしやいましお花の母も今は何から何まで世話に成つて居る三成のこと故に起きて来て 隠往つて入つしやいましと送る直助が提打を付けて薬箱をかつぎ先に立つて行く跡から三成が雪を踏碎さくやつて来る 三直助非道く積つたなア 直ぬれエ雪でございます自棄と

大 高 源 吾

ハア降りやアがつて…… 三提灯は大丈夫かな 直大丈夫ですす手拭をヨッ被せて来やしたから腰の道入る心配はござせん 三角やしきを出て那れがらツいと曲つて参つたのは隠庭堂橋 直旦那様 三サ、直雪が足駄の齒へ通入つて歩き憎くなつたら然ふ仰しやいやし竹ッ筥一本持もて来やしたから拂つて上げますすべい 三能く行届く男だ竹の筥を持つて来るとは恐れ入つたものだ好い塩梅に齒が一採に成るとポコリと落ちるから轉ぶやうな事は無い其方は股引も穿かんで嘸寒からう 直何んの寒いことがありやすものですか越後へ往つては覽じる斯んな事だねエ身躰位い雪が積りやすぞ 三威勢の好い男だ 直お氣をお注げなせへまし 三サ、ザクリと橋を渡つて降り際の所まで来ると丸石か雪の下に多くあつたものがヒョロヒョロ降りて来ると北の方からヒューと吹いて来た激しい風傘を

大 高 源 吾

取られまいと思ふからアツといふ途炭に足の方がお留守に成つてツルリ滑つた三ツフーッ下タンと傘を持つた儘美事に倒れる失策つたと起上がらうとしたがチヨククラと起きる事の出来な

大 高 源 吾

思つて居るかヨウ越後無宿の直助と云つて子供の時から手癖が悪く嗅ニ飯も二度三度傳馬町の牢内でも少しは市の利いた男だぞ世の中を喰詰めて五尺の身躰の置き所のねエばかりに汝

大 高 源 吾

れを十四日犯した罪も深川や土地も丁度間慶堂三途の川は渡ら
ずと直ぐと調へは受けられる大石様や友達へ宜しく詫をするが
好い天道様へ奉公の爲直助様が殺してやつた 三ツムー……直
迂鳴るなく畜生奴若しからう口惜しからう然し汝エばかりは
地獄へやらぬ是から三角やしきへ戻つて可愛い伴や娘を始め汝
エの惚れてる女房のお花も叩つ殺して一緒にやるから冥土で醫
者でもするが好い汝エには妄者の療治が相當だと三成が腰に差
したる秋廣の刀を以て致命を差し血を拭つて己れの腰へ納め大
膽にも懐中へ手を突込んで紫縮緬の帛に包んである大きな紙入
れを取つて目方を引くと確かに十五六兩 直十五や二十は這入
つてるな此方へ巻上げてやらう冥土へ行くにやア六文で澤山だ
三角屋敷へ戻れば二百兩と三百兩纏つた金子が這入るア、一有
難エなア待てば海路の日和とやら少しマンが直つて来たど死骸

大 高 源 吾

を河の中へドブーンと放り込む恐ろしいかな因果應報同じ十二
月十四日の夜に直助の爲に殺されて此死を遂ぐるとは悪いこと
は出来ない者でございませう右直助といふ奴が三角屋敷へ来て慈
悲も情けもあらばこそ爰に惨劇を演じます夫は次回……

第 四 席

山田三成の門口をトン／＼と叩いて 直へエ旦那お歸り且
那がお歸りでがす 女ハ「お松といふ女中が女部屋から隠居
さんど兩人で寝て居たが今しがた出て往つたんだが大層早く歸
つてお出でたと思つて隠居さんは頭を上げて居るお松は玄關
から雪の中は足駄より却つて庭下駄の方が好から 松お歸り遊
ばしまし大層旦那はお早くございませう 直ナニ其所まで行く
とお女房さんの癪は落付いたから此雪の中をお出でには及ばな

大 高 源 吾

い明日お見舞を願ひたいといふから幸いだつていふんで引返し
たのだよ 松チャ然ふ……と云ひながら門をギーと明ける長い
奴を提げて直助が這入つて来た 松チャ直さん妙な物を……と
いふ奴を何を吐しやアがるんだと肩口からパツサリアツといふ
と雪の中へ打倒れたビタリと門を閉めて玄關へ上つて来た聲が
歸つて来たと思ふから寢所がら起上がらうといふ時に玄關を上
つて奥の間へ這入つたのは這は如何に小山田庄左衛門にはあら
ずして藥箱の直助ばかり 直貴郎お歸り遊ばしましと出て来た
お花 直ライは新造乃公ア今間魔堂橋の上でお前の良人庄左衛
門を…… 花コレ其方は藥箱持の…… 直エ、イシタハタ爲る
ねエグズ〜いふな小山田庄左衛門といふ不忠な奴……とは先
刻玄關で藥を切つて居た時に知つた山世しの直助と安心をして
汝エ迷がヒソ〜 語つた來歴話し大石内藏之助様から預かつた

大 高 源 吾

金子を以て忠義の黨を脱し此所に世帯を張つて山田三成といふ
高利貸兼お醫者と成つてしらばつ暮して居やアがる汝エ達のや
うな悪者の金子を取らなくつちやアお天道さまへ奉公が出来
ねエ今間魔堂橋の上で小山田庄左衛門は乃公が殺して来たコレ
見ろ是は懐中にあつた紙入れだ然し亭主ばかり冥土へやつちア
那の世で淋しがつて居やうから汝エも一ト思ひに殺してやる
花アレマアお前は……と逃げんとするのを逸足出だして鬚を掴
み引摺倒して胸から背中へブツ〜〜ドゥとばかりに倒れ
たスヤ〜 寢入つて居た三ッに成る庄太郎といふ令息ちやんを
胸元を貫かんとした 庄爺や嫌だ〜と首を振つてる奴を 直
ぼつちやん痛くねエやうに切つて上げますよ非道い奴があれば
ある者愛らし盛りのはつちやんをズハツト一刀の許に切つて當
才に成る女の子乳が無いからワツと泣出した流石に直助も太刀

大 高 源 吾

先き鈍り 直可愛想に……斯んな小さな娘ッ子イヤ然ふでねエ
志賀團七なんてエ話しもある女だからつて大きく成りやア助太
刀をする奴も出来るエ、一と思ひに……ツクッ 直柔らけエヒ
やアねエかヅクくくく 香物と間違ひてカクヤに刻んで居や
アがる用衣厨の抽斗やら那方此方を探して百兩五十兩百兩と集
めた金子か三百七十五兩此奴を胸巻へザライ込んで懐中へスツ
カリ仕けて 直フ、ン好いお給金に有附いたイヤ然し婆アがモ
ウ一人居る那奴を生がして置ちやア露顯の元だどスタく女部
屋へ来るど是より先き奥の騒動を聞いて唯驚きの餘り臺所の上
板を上げて縁の下へ潜入り込み段々奥の方へ這入つて仕舞つた
直婆ア出て来い様の下で寝へ上つて居る如何程悪黨の直助も縁
の下まで這入つて行くことば出来なよし出来た所(が暗いから
何所に居るか分りませぬ 直エ、逃げられたよ此所にぐづ

大 高 源 吾

して居て往來の者が心注ぎでもしちやア成らん間慶堂橋には薬
箱も放り出してあるから少しも早く此所を立退こう婆アだもの
何れ程のことが出来るものじやアねエと刀をチャツキリと鞘に
納めて其奴を以て三角屋敷を飛出した抑も此直助と云へる者は
越後の國三條の在の者でありまして江戸へ出て種々の悪事をい
たし世を忍ぶ爲に山田三成の家へ僕に這入つたのであります去
れば越後路を差して下つて行きました此方は翌日に成つて老婆
からお届けに及びは検視役人出張に及び其むとたらしい死方と
因果應報の恐ろしきに舌を巻きました兎も角も直助の人相書を
以て委しくお尋ね者と成る泣くくお婆アさんが人を頼んで聲
の死骸を探し娘孫の死骸と併してお葬禮を出しました其所で有
金は豫め持つて行かれましたが未だ近所に貸金もありませんから
夫等を譯を話して五兩の貸のある所は二兩位いに負けて一時に

大 高 源 吾

取立てをいたし尙聲が死んで見れば竈の下の灰までも自分の物
でございますから家財道具を賣却なして金子につばめ其所を涙
ながらに立退き元己れの住つて居る雲光院門前への八番といふ
所へ来て聊いかながら世帯を張り座して喰へば山も空しくといふ
から敵の直助を探しながら江戸市中を修業をして歩こうと斯の
如きく考ひて老婆は黒染めの法表に鐘を叩いて人の門口に立ち如
何程づゝかの鳥目を貰つて歩いて居る。話し變つて直助は越後の
國三條へ立戻つて来たが何うも累卵なくつて三條にも居られな
い越中の國へ来て山に這入り野郎熊野ホクチを買つて来て両方
の類へ押付け熱いのを忍んで火を付けました忽ちの内に顔が腫
れ上つた其奴を繩を丸めて叩いて居る火膨れに成つた所を繩を
丸めて叩いたから堪らない皮は破けて肉は焦れ二三日立つと撥か
が流れる實に痛い夫を我慢して今度は藥を買つて来て其傷口へ

大 高 源 吾

練付けた全で人間の阿部川見たいな物が出来上つて仕舞つて以
前の面影は無くなつて仕舞ました自分で鏡へ向つて見て直占
めたな乃公にせエ自分だか何んだか分らなくなつて仕舞つた斯
ふして置きやア如何程人相を以て尋ねたつて分るものでねエ
ア、一悪い事は割が好いやうだが能く考ひて見ると割に合はね
エものだと獨り言を云ひながら是より三年の間だは加賀能登越
中の間だを奉公したり何かして歩いて居た内に顔の方も堅まつ
て祥樂も張らなくつて濟む非道い松皮瘡の如くに成つて仕舞
ましたから直イザモウ好からうから徐々く江戸へ出掛けやうか
何うも江戸に住ひ付けた者は田舎には居られねエ住めは都どとい
ふことをやします酒屋へ三里豆腐屋へ二里といふ山の中に住ん
で居ても住んで見れば都のやうな心持ちがするといふ所を云つ
たものか又は同じ住むなら都が好いと云つたものか兎も角も江

大 高 源 吾

戸の風に晒された直助一日たつて田舎に居られるものでござ
いません且つ直助が罪の恐ろしい爲に天賦の面を損ねてしまつ
て二々目と見られぬ男にはなつたやうな物の其悪いことをする
根源を考ひて見ると女に戯れやうとか旨い物を喰をとか好い着
物を着やうとかいふ所から金子を取つたのでありますから實に
片田舎の通土に居ては思ふやうなことも出来ないう旨い物も喰べ
るふどが出来ない三年振りで京都へ出て来て京都から東海道を
下つて江戸表馬喰町の雁豆屋さんといふ旅宿屋へ来て田舎から
ボツと出て来たお客人と見せ掛け其夜は風呂へ這入り飯を喰
べて寐に就きましたしたが翌朝に成るとは飯が済んでしまつたと下へ
ノコ下りて来て下女に向ひ直姉さまア済みましねエが此
方のお若エ衆様に鳥渡頭を貸して頂きてエもんですが女ハイ
畏りました只今若衆を遣はしますからお座敷に座つて入しつて

大 高 源 吾

下さいまし態々出てお出でに成りませんでもボンと手をお
叩きに成りますすれば用を伺ひに参りますから直ハイ……夫
じやア勿跡ねエですが女ナアエモウお客さままでございますか
ら……ど女も斯んなのは馬鹿にして居る座敷へ戻つて座つて待
つて居る内に女アノ吉どん二階の一號のお客さまがチヨイど
お顔を貸して呉れと仰しやいます直ア、然ふ採手をしながら
直エ、お早うございます若い衆吉藏と申します者でございます
が何か御用で直ハア吉藏さまでございやすかお前さまに少し
お聞やしてエことがあるですが私等アハア國から始めて出て
来たでがアすが淺草のう観音さまは何う参つたものでござい
やせうか教へて頂きてエもんでございやすが直エ、淺草の観音
さまでございますか何んならば案内を申し上げて宜しうござ
いますか直ア、ハ案内を頂きてエなアは手数さまでござい

大 高 源 吾

ますべエ教へて下されば私一人で参りますべし 吉左様でございませうか夫ならお教へすしませうが此馬喰町四丁目をお通りに右の方へなりませうと浅草のお見附といふのがございませうお見附を道入つて入つしやると直ぐに茅町一丁目瓦町天王町夫から殿前八幡町諏訪町駒形と斯う行くんでございませう 直ハア左様でございませうか 吉駒形に小萬堂といふのがございませうからお氣をお注げなすつて其所で道が右と左りに二ツに岐れて居ります右の方へ道入ると千住の方へ往つて仕舞ますから左りの道をお出でなすつて…… 直ハア成程 吉左りの方へお出でなさいませうと観音さまの雷門といふのへ出ます其所を道入ると仲見世夫から仁王門観音さまと斯うなります 直ハア左様でございませうか 直お参りをなさいましたらお堂の後から左りの方へ往つては覽なさいませう奥山と申して居る見世物小屋が並んで

大 高 源 吾

居りますから 直有難ふがす 吉其所で旦那さま失禮なことを申上げるとやうでございませうが江戸には拘取といふ物があつて因合の旦那方と見ると兎角には災難がお有勝ちでございませうから大切な品は手前共の帳場へ預けて入つしやる方が御安心でございませうホンの傍小遣ひだけをお持ちなすつて入つしやいませう又途中でお買物でもなすつた時は馬喰町の豆腐屋へ届けて呉れると仰しやいませうれば商人の方で手前方へ持つて参りますから金子をお持ちに成りますと殊に由ると取られる心配があると思はれませんから…… 直左様でございませうか有難ふ存じますでハア取られるやうな金子も持つて居りませぬから心配なく 吉左様……で夫じやア往つて入つしやいませう 直殊に由りますと浅草の観音さまで参詣をいたしまして何所かで仕度をして來るかも知れませうから 吉左様でございませうか 直余より銀イ

大 高 源 吾

高くなつて何所か旨い物を喰はせませう 吉先づ雷門前の万
年屋すみ屋杯とすのが安くておいしい物を喰べさせます見世
ではおでん杯を賣つて居りますがお好みによつてはお差身や養
肴位いは喰べさせます 直有難ふ存じます左様なら往つて参り
ますと太い股引を穿いて藍草履を買つて貰つて太い鼻緒のすが
つた裏の附かない藤倉てエ奴羽織を着ないで帯を胸高にしめて
大きな紙入れを懐中へ入れて尤も昔しのこつたから紙入れの小
さいのは少しも流行らなかつた紙入れが小さいと殊更にいろく
の物を入れて是を膨がした位いの物馬喰町四丁目を出て淺草藏
前通りをブラーリと直助やつて来る淺草に觀音様は知らな
い所か散々江戸にも居て豆腐屋の番頭よりは委しく知つて居る
位い然し何所までも田舎からボット出といふ風に口を明いて珍
らしさうに物を立つて見て居たりキョロとして歩く巾着切り

大 高 源 吾

が向ふから来て此奴仕事に成りさうだと目を注げるとモウ直助
の者が知つて居る 直ハ、ア巾着切りだな汝エ達に取られて堪
るものか「ゴ」しヤアがると逆さまに奪つて呉れにヤア成ら
ん……」と此方で妙な目をするから 巾着切「ヤ」此奴ア
確乎して居ヤアがるなど歸めて向ふへ行き過ぎると又此方のほ
うから拘取がやつて来る 直「来た」……」と見て居る内にコリ
ヤア無益だ油断の無い奴と行過ぎて仕舞う淺草の觀世音へ參詣
をいたしましてお堂をブラリと那方此方へ口を明きながら
歩いて居る内に下から階段をトンと上つて来た職人風
の男新らしい印袴天を七枚重ねて盲稿の股引に腹掛けの新らし
いのを掛け八坂の白くけを締めて銀鏡の煙草入れ三十二三に成
る男羽織といふ奴を此所へ極込んで草履の突掛けお賽銭をボ
ンと投げて拍手を拍つて拜んで居る願て裏手の方へ廻つて石段

を降りやうとする奴を直助がボーンと背中を叩いて 直熊久し
振りだつたなア熊といはれた男は振廻つてジッと顔を見て居る
熊誰方がございませしたつけ 直頼氣なる乃公だアな 熊其乃公
といふのが分らねエ誰だつけ 直直助だ越後三條無宿の直助だ
いお前と兄弟の約束をした直助を忘れたか汝エの背中を叩いて
兄貴暫くといわれるやうじやア此江戸の観音様のお堂には居ら
れねエ彼の男はビツクリして 熊夫じやア主…… 直ッッッ
捧奴エ詰らねエことをいふねエ未だ河岸は歸るめエけれども一
杯飲まう浅草の観音様の後に鳥渡した料理屋で染川といふのが
ある其時分のこつたから未だ贅澤が盛りといふ理由で無いんで
ございませすから質素な家で朝歸りの客も頼がて引けてしまつて
客は一人も居ない二階へトン／＼と上がりました 直熊乃公は
山出しの田舎者と見せて居る汝エ好いやうに其所んどふるを見

つくりつて田舎の大遊客といふ風に乃公をして旨エ物を眺みて
呉れ 熊大變なことに成つて仕舞つただが兄貴断つて置くが乃
公ア金子は然んなにはねエから割合勘定と來ると…… 直心配
するな汝エに損は掛けやアしねエ此家は五疊六疊と別れた別間
の座敷でございませすから斯ふいふ奴の會合には至極適當でござ
います頼て女が夫へ出て參りまして 女入つしやいまし 熊姐
さん茶碗とお差で酒を持つて來てお呉れ 女ハイ畏りましてご
ざいませす河岸は未だ歸つて參りませんが有り合せの品で宜しう
ございませすか 熊ヲ、然ふかいイヤ歸つて來なくても冬だから
差聞ひは無い河岸が歸つて來たらば然ふ云つてお呉れ未だ眺へ
る物はあるんだから 女畏りましてございませす 熊何しろマア
若旦那の前でございませすけれども是れが江戸の観音様でござい
まして 直ハア立派なもんでございませすねエ私共の圖へ往つた

大 高 源 吾

んじやア逆も斯んな立派なお堂はございませぬ私共の壇寺は
國では随分エケエ方ですが此十分一でがーす國のう出ます時
は浅草の観音さまへお参りをするのを樂みに参りましたんで
さいます大層お賑かなつてございやす 熊毎月お茶どう日と
いふのがございませすが其日なんぞにお参りをしやうもんなら袖
の抜けね工程の賑かさでございませ 直然ふでござりますかお
待遠さまでとお眺ひが来る 熊姐さんお酒を跡を付けてお呉れ
女ハイと又酒を持つて来る熊が如何程か包んで祝儀をやる五月
蠅い茶屋で無いから女中が尾て居てお酌を始終して居る内は無
い又お客の都合に由つては居られるのも好いが居られないのも
好い是も場合があるもので 熊何は兎もあれ兄貴はマア云わす
ともものこつたが足掛け四年振りて今日お目に掛つたが深川の三
角屋敷でア、いふ一件をして飛んだつ切り何所へ往つちまつた

大 高 源 吾

か更に分らなかつたが全体今まで何所に往つて居たのだい直
ハ、ハ、知つての通り日本國中配符の廻つた此直助是まで隠し
終せるのは容易なことねエ 熊然ふしてマア兄貴大變な面に
なつたなア 直ハ、ハ、面アお前斯ふいふ塩梅にやらかすには
餘ッ程骨が折れたのよ熱い思ひや苦しい思ひをして漸く是れま
でにしたんだが一寸見ちやア昔しの直助とは見へなからう 熊
何むしてハ 一寸所か能く見ても分らねエが聲で漸う分る位エ
のものだ然うして大層汝エは様子が好いが今じや何をして居る
のだ 熊何に兄貴何時までも馬鹿アして居ても切りがねエから
女房アを持つて漸くのこつて今じや麴町の四丁目に熊次郎と云
つて肴屋を開き親分とか兄貴とかいわれるやうになつた今日は
早く河岸へ出て来て来て河岸でチャンと極りを付けて家へ荷は輕子
に持たしてやつて然うすりやア若エ者が居て得意先の方は何

大 高 源 吾

うでもして呉れるから其所で観音様へお参りをしやうと思つて
出て来たお陰で別段今日にも困らず金子こそねエが樂に此世を
暮せるだけ仕合せよ 直其奴ア豪氣だなア好い蓋梅だ 熊時に
兄貴は當時何所居なさるんだ 直乃公ア馬喰町の豆腐屋へ泊
つて居る何所か江戸の内へ身上を持つて今度身固める量見
だ何うだ汝エの家の近所に明店はねエか 熊然ふサね山の手て
エ所は容易に人の働かねエ所で明店と云つちやアねエなア 直
ねエなけりやア仕方かねエ當時汝エの家へ往つて世話に成る積
り…… 熊冗談云つちやア不可ねエ困るじやアねエか 直困る
と云つたつて仕方がねエや何うしたつて乃公ア汝エの家へ往つ
て厄介になる積り當分の間だ熊置て呉れ大丈夫だよ汝エに迷惑
を掛けるやうなことは爲ねエからウソと云つて置て呉んねエ
熊夫りやアおれとお前との中だから好いが又女房めが色々なこ

大 高 源 吾

とを云つて爲やうが無からうせ 直汝エ何か女房に飯を喰わし
て置て貰つて着物を着せて貰つて小遣エを貰つて今日を送つて
居るのじやあるめエ汝エが何から何までの事をして女房アを喰
はせて居るんだらう 熊然ふよ 直筈棒奴エ女房アがグズ
いふつて然んな奴があるものか 熊けれどもよ…… 直じやア
好いやな汝エには頼まねエ 熊アイ 怒つちやア不可ねエ
直怒りやアしねエけれども頼まねエよ其代り乃公が明日にも上
へ訴へ出る時には三年前深川の三角屋敷で山田三成を殺した時
の金子は半分熊次郎に分けてやりました熊次郎は夫を資本に麴
町四丁目に肴屋の見世を開きました善悪の二夕筋道に別れて熊
は堅くて斯ふやつて居るが私しは根が怠け者でございますから
金子を使ひ盡してお上の手に上がりましたと斯ふ申上げりやア
氣の毒だが熊汝エは乃公の巻添を喰つて跡で無實の罪は分るに

大 高 源 吾

した所が二年や三年は臭い飯を喰はにやア成らん 熊ナイく
兄貴困るじやアねエか乃公アお前に百だつて貰やアしねエ 直
乃公だつて遣るものかな然し何うせ一人で行く位エなら友達の
一人も心ゆかせに引張つて行く方が好い乃公ア度々傳馬町へ往
つては牢内には馴染が多い朝湯へ道入る氣になつてるのだから
日本中の悪い奴の居る牢内乃公が往つて五音の廻し方で汝エ
は大黒柱の所へ縛り上げられて皆んなの尻を舐めてトントコト
ンで踐殺されるか其時の都合に由りやア何んなことをされるか
知れねエ汝エの家へ往つたつて女房アがグズく云われねエや
うに何うでも言葉の先きで成るじやアねエか乃公を越後の大盡
の息子にして女房アや此方のお父さんには乃公もいろく世話
に成つたのだからお世話をして上げて呉れろと云やア女房アだ
つて承知をする……… 熊ナニ若旦那に……… 直ウム其代り決して

大 高 源 吾

汝エの家へ損の立つやうにはしねエー其内に乃公も何うか何所
かへお腰を据て一年でも一年半でも堅氣に世の中を送つてか
らお處刑を受ける分には好いが未だ悪いことは爲たやうなもの
明しい暇といふのは無エんだヨウ熊後生だから頼むせ 熊成
程じやア仕方かねエ好うございませう分家へお置きすすとしや
せうが何時来るへ 直實は今もいふ通り宿屋飯を喰つて居るん
だから馬鹿々々しくつて仕様がねエ明日の正午頃までには行く
せやイ姐さまア酒の熱いのを持って来て下つせエ 女ハイ畏り
ました唯今持つて参りますでございませう待遠さまで 直アイ
姐ア様ア一ツ召上がりやしな 女頂戴いたしますでございませ
チヨイと十八九に成る憎からぬ女お酌をして貰つて熊次郎と兩
人で酒を飲んで居る充分に飲んで兩人は泥酔いたし勘定は直助
が濟せまして 熊じやあ明日お出でなさる時は唄アに万事覺ら

大 高 源 吾

れねエやうに……直ハ、ハ、ハ、然んなへマな直助さんヒヤアね
エよ時に熊此所に金子が三両ある 熊要らねエよ 直好いやな
取つて置きねエ金子が邪魔に成つて困るといふ身分でも無から
う 熊然ふですが済ませんねエと万事喋し合せを爲て熊次郎は
麴町の家へ歸る直助はブラリと奥山の觀覽物を那方へ這入
つて見イ此方へ這入つて見イ久し振で奥山の賑ひを見て左あら
ぬ体で大豆屋へこそは立歸りました 番お歸りなさいまし 直
ハハハ今歸りました何うもハア淺草の觀音様ちうは藥エ賑かな
所でございませすなアブツ魂消げやしたよ 番左様でございませ
か随分奥山は賑かでございませう 直熊さやしたよ 番は疲勞
さまで 直ハア疲勞れやした 番お風呂が宜しうございませすか
ら直ぐお湯へお通入んなさいまし 直ハハハ有難ふ存じますお
湯と頂戴仕りましたして飯ア喰べて早く寝ますべエとお湯へ這入り

大 高 源 吾

飯を喰べてゴロリと寝た。此方は肴屋の熊次郎が直助に見込ま
れて飛んだ者に逢つた家へ置て若し那の悪事が顯われた日にや
ア此方まで飛んだ怨添を喰つて堅氣な身体を汚さにやア成ら
ん去りどて嫌だと云やア那んな事をいやアがる一困つたものだ
と女房にも夫と明かせず腕を組んでボンヤリと己れの家へ歸つ
て参りました女房が 女ヲヤ熊さん何うしたんだい好い嗅いが
するヒヤア無いか 熊ウム今日は淺草の觀音様へお参りをして
其歸りに一杯飲んで來た 女然うかい夫りやア好かつたねエだ
がお前何んだか心持の悪るさうな顔をして居るとヒヤア無いか
熊何と無く心持が悪るくつて仕様がねエ 女悪い物でも喰べて
來やアしないかい 熊料理屋の物だ悪い品を喰わせる理由はね
エから 女何しても大事にお爲よといふので女房も大きに亭主
の顔色の管ならぬに心配いたして居りました明日の朝起きて熊

大 高 源 吾

次郎「竹や氣の毒だがなんだ河岸へ乃公が行くんだけれども何
んだか心持が悪いから汝へ往つて来て呉れ 竹へエ宜しうござ
いますと家の若エ者が河岸へ出て行く跡で女房と 熊何んだか
心持が悪いから一杯飲もう 女然ふかい見世にある魚を自分拵
ひをして水入らずの夫婦の酒宴差つ押へつ火鉢を隔て、一杯飲
始めた彼は是れ四ッ少々過ぎと覺しき頃 直、免下さいまし 熊
来たなど熊次郎はギックリいたして 熊へエお出でなさいまし
直、免下さいましアノ一越後屋熊次郎様のお宅さまは此方さま
で 女、ハイ熊次郎は此方でございます何方から入つしやいまし
た 直、免下さいまし女房が見ると恐ろしい色の黒いツッハリ
だらけな變挺な顔をして居るから 女、マア何んてエ恐い顔だら
うと呆れて居る熊次郎が見るより 熊、マアツコリやア若旦那能
くお分りに成りました 直、ハア何うもハア熊次郎様は免下さい

大 高 源 吾

ましお宅さまでござりやしたか漸うハア分りやした 熊然ふで
すかチイお前お洗ぎを持つて来て上げねエ 女、ハイ 直有難ふ
ございやす疾にハア一通出ますべいと思ひやしたが終々無沙
汰のういたしやしてございます國表の親父がやしやすには熊次
郎様見てエな優しく能く行届く好い方はねエ江戸へ往つたら熊
次郎様の所へ是非行けよとサされやして江戸へ出て参りやした
熊、左様でございますか夫りやアマア結構でした何しろお膳を片
附けねエ 直、何うかハアお構ひ下さいますなよ 熊、好い所で
さいましたお茶を出しねエ菓子を持つて来ねエ 直、エ、熊次郎
さまの前でございます私等アモウハアお神さまに始めてお目
に掛ります熊次郎様の同國の者でござりまするで切望宜しく
願エ申しますでございます 女、ハイ恐れ入ります熊次郎が又
色々厄介に成りましたでございます 直、何んの厄介所で無エ

度マア國を出て來たのは外の事だねエで實は隣り村の庄左衛門
 が自分の娘を何うしても私の女房に片附けにやア成んねエとい
 ふだ私も貰うべいかと思つた所が同じ村の久兵衛の娘が私にハ
 ア惚れ込んで是非那の方の女房に成れなけりやアチッ死んで仕
 舞うと両親に向つて泣いて喚ぐでがす 熊 何を笑つて居る
 んだ失禮だぞ止しねエてエるとよ 直 お神様ア笑つてお出でな
 ざるお笑いなさるも無理無エでがすが 熊 若旦那ア汝エ斯んな
 顔をしてお笑いなさるも無理無エでがすが 熊 若旦那ア汝エ斯んな
 女が惚れるんだ 直 私顔と云つたら自分で鏡を見て吃驚する位
 エでございませすが夫でもハア熊次郎様の存じの通り身上が良
 エもんでございませすが何うしてもマア那方からも此方からも
 娘を嫁に遣すべいらうですけれども那方の娘ッ子を貰うと此方

大 高 源 吾

へ濟まねエ此方の娘ッ子を貰うと向ふへ濟ねエと云つたやアな
 形狀で親父がいふには夫ヒやアマア仕方がねエから小遣エのう
 持つて江戸へ往つて熊次郎様の所へ往つては厄介に成つてゐる其
 内には娘ッ子が夫れ口が入つて片附くだらう其時に戻つて
 來い嫁おわり盛りの新造ッ子を何時迄も家に置く氣支エはねエか
 ら小遣は跡から送つてやるに由つて江戸へ二三年往つてろ
 ふやしやしたから親父から小遣些つとばかり貰つて出て參り
 した熊次郎様當分置て下さいませすやうにお願エサしてエもんで
 ございませすが 熊 ハア左様でございませすかイエモウ何んの遠慮
 も要りませんに由つては悠然と入つしやいませ 直 ハア何うか
 お願エサしませす 熊 決して涉心配はございませぬ 直 ハア有難ふ
 存じます 傍から女房が 女アノ熊さん昨日お前さんが親音様へ
 往つたお留守にね大家さんが來ていふのには今度大分世間が騒

大 高 源 吾

大 高 源 吾

居る深い多戀親の方はお泊りやしても差間ひ無いからと斯ふ云
ひましたのですからお泊りやす方が好いよ貴郎斯んな汚ない所
ですがほ悠然お出でなすつて下さいまし……直助腹ん中で「此
唄ア容易な奴じやアねエ熊公奴好い鹽梅に尻に敷かれて居やア
がる馬鹿にして居やアがると思つたが左あらぬ躰にて直宜し
くハアお願エやします 熊マア若旦那二三日歩足休めをなすつ
て夫からは悠然江戸見物をなさいまし 直ハイ江戸の神様佛様
へお参りを爲てエと思ふでが私ハア世の中へ餘り罪を作り
たく無エと思つて居るでがす唯モウ神佛を信心して後生の好い
やうにと夫のみを心掛けて居りますで…… 熊此野郎餘り罪を
作らねエ所かい人並外れた太エことを爲やアがつて……」と腹の
中是より日々熊次郎の宅へ世話に成つて居りましたが夜るに成
つて若い衆は遊びに行く女房は湯に行く直助は二階から降りて

大 高 源 吾

来て 直熊ア 熊エ、 直汝エの女房は大變者だナア大家さん
で然ふ云つたから泊ることば成らねエと云つたが三兩呉れてや
つたら忽ち様子が變つてお世話やしても好いと吐しやアがつた
せ 熊けれども兄貴お前然んな面をして娘が惚れたの何んのと
馬鹿なことを云ひなさんな可笑くつて腹の皮を捻つて仕舞つた
ア面と相談して相當なことを云つて呉んねエよ 直ハ、那の
位エに吹掛けなけりやア汝エの女房は胡麻化すことが出来ねエ
や何んにしても汝エの好いやうにやつて呉れど熊次郎方の世話
に成つて何氣なく送つて居るスルと爰に麴町五丁目の新道に櫻
湯と云ふチヨイとした湯屋がある繁盛する湯屋でありますが是
を賣りたいといふ話しを聞きましたから直次郎が直熊や横町の湯
屋を賣りたいといふ話しを聞いたが乃公が一ツ買つて湯屋を始
めてエと思ふのだが何うだらう汝エの所の女房は狡猾だから乃

大 高 源 吾

公が湯屋を始めたら只這入れるなんて悦ぶかも知れぬエや何う
だいな世話の出来るものならして見て呉んねエか湯屋と化けて旨
く浄神輿を据て當分樂に世の中を送つて見てエと思ふのだが何
うだらう 熊成はど夫りやア好い考エだ何もお前さんが自分で
人の垢を流すといふのじやア無し三助といふ者が居て万事をす
るんだから一ツ遣つては覽なせエまし 直然ふだ遣りやうに出
つちやア随分面白い家業だと思うんだから夫に就て女房アの前
へ乃公から始めてエといふのも可笑なものだから汝エから一つ
乃公に勤めて呉れ 熊好うございませす云ふんで或日のこと得
意先きへお惣菜を配つて仕舞いお得意の極りが付いて仕舞つて
掃除をして仕舞つた若旦那ア湯から上つて来た 熊若旦那お茶
が這入りました 直有難ふがす 熊何うです若旦那斯ふやつて
毎日々く遊んでお出でなさる遊んで居るのを彼是れいふのじや

大 高 源 吾

アございませんが唯長の日一日遊んで居た所で退屈で爲やうが
あるゆゑと思つて居るんだ何うでせう若旦那の前だが湯屋を始
めたら何んなものですエ、湯屋を始めたら何んなものです 直
熊次郎様の折角の思召だが私はハヤ何んで湯屋杯が出来ますも
のか人の背中の垢を流したり薪を割つたり水を汲んだり……
熊イヤ夫りやア一人では出来ませぬ奉公人をお抱へなさいまし
三助といふ者を抱へりやア何んなに忙がしくつたつて貴郎が自
分で水を汲んだり薪を割つたりしなくとも濟みます横町の櫻湯
が賣物なんです一切の物が附て百五十両だ雑作疊一切が附て居
るんですが何うです澤山は負かりますゆゑけれと十兩位エは
愛嬌に負けるかも知れませぬ何うでせう 直ハア然ふですか結
搦でございませす何うか一ツお頼エ申してエもんです 熊好うご
さいませす 直万事熊次郎様お願エ申します 熊好うございませす

夫なれば……と櫻湯の亭主に話しを爲て十兩負けさして百四十
兩奉公人も其儘居抜きといふことに成つて町内の仕事師を頼み
大工さんを頼んで板の間から入口を一切直さした奥に二間の住
ひはあるが夫りやア構はねエ入口はスツパツ市松の盛を敷て入
口には櫻の花と短冊を付けた野籬を男湯と女湯に掛け風呂も檜
作りの美麗事にして櫻風呂と改め櫻風呂の權兵衛といふので見
世開きをいたしました二階にはチヨイと十七八位いの美麗な女
を置いて恭盤と將恭盤を出して近所の若衆の遊び所といいたし香
煎湯の一抔位ひは只出すやうにいたしましたア近所一般の大
評判で甲チイ吉や今度横町へ大層な風呂が出来たじやねエか
言ッゝ万事が美麗事だから三丁目の湯をお慶しにして出掛けに
やア成らねエた云つて皆追々に來るから思ひの外繁盛をいたし
て居りました夫なりけりに權兵衛が何事も無く畳の上で往生が

出来れば是れ實に神も佛も無いのでございませうか天道は正道
を照し玉ふチヨツとした所から此權兵衛と改名をして居る直助
の悪事が顯わるゝといふお話しでございませうが一寸一と息いた
しまして……

第 五 席

櫻風呂の繁盛は實に近所の湯屋が恐れる位い其上に權兵衛奉公
人の面倒が好いから家に居る者まで皆如才無いに由つてお客の
評判も宜しい又人を殺して錢を取つて來た奴だから人にも旨い
物を喰わせ奉公人にも給金の外に如何程か骨折りをやるから奉
公人も必死と成つて働きます能く商人でもわの家の奉公人は皆
んなブツチヨ一面をして居ると云つてお客の腹を立つやうな家
がございませうが那れは皆奉公人が悪いのでは無いので主人の奉

大 高 源 吾

公人を使ひ方が悪いから自然お客にソンプリが悪いだから見世
を熾んにしやうと云ふには先づ奉公人からして目を掛けなけれ
ば成らぬものでありまする櫻風呂の家は客がドン／＼来て繁盛
をいたして居りました今では麴町から番町邊那の邊には絶て屋
敷も見へませんが昔しは那の邊は一面の大名屋敷本屋敷であ
りました其部屋々々には仲間が集つてドン／＼博奕をやつた
ものであります夫で負けて仕様が無いか櫻風呂へやつて来て
甲何うも親方済みませんが厄介ですが今度友達が身替が少し
悪くつて金比羅へ参詣するマア表向きは行くんです行當りバツ
タと共に草枕で四國へ行くと斯ういふんですが奉賀帳ですがお
氣の毒様ながらお頼みします 權ハア然ふですか夫りやアお
氣の毒様な理由でございます承知いたしましたとございますと人
さまが一貫も交際つて置く所へは三貫位いは交際しても遣るポツ

大 高 源 吾

〳 懸意の者が出来て来る内に 甲何ですナ權兵衛さん貴郎マ
ア斯やつて番臺に座してお出なさりやア涉退屈でせう向の屋敷
に好のが出来ましたがお出なさらねエか 權有難ふ存じます私
は博奕杯といふ事は遣た事がございませぬが少とは樂みに好ご
さいませうからお供をいたしませうと博奕場へ往て如何程か勝
つ、スワツとかすりを出して歸て来る博奕場で殊と由ると悪い奴
が「乃公はスワツパリ取れて仕舞て手も足も出ねエ、那奴を脅して
如何程か借りてやらう、田舎から出て来やアがつて金子があつて
湯屋をして居る親方もねエもんだ……エ、櫻風呂の親方 權ハ
イ何んでございます 男、賊に濟みませんが少つとばかり飲まし
て貰ひてエもんですが何うでせう 權何を上がります 男何を
上がりますつて知れて、アね、飲まして呉れるといふのは酒だ
アな 權ハア然ふでございませるか、チヨツとお閑がございました

大 高 源 吾

らばお酒の一合位いは宅へ入つしやいまし 男馬鹿ア云ひねエ、
お前の家へ能く往つてエプリ臭エ酒を御馳走に成るには及ばね
エ、乃公ア勝手に茶屋で飲みてエんだ一杯騎たつて野も當るめエ、
エ、チイ一杯買ひねエな 權、ハイ左様でございませすか、私ハア
お前様方のやうなお人にお酒エ御馳走する買祿はねエ人間で
さいます 櫻風呂の權兵衛でございませす、お酒エ上がりたくば御自
分の手銭で一杯召上がるが好いでお氣の毒様だがお前さん方に
脅迫されて一合が五勺でも買つて上げるやうな權兵衛は毒碌は
いたしやせぬ 男、ナニ酒は買へねエ 權、ハイ買はれませしねエよ
男、好し、然んな事を云やアがつたつてはア然ふですかと引込
むやうな乃公ヒやアねエ、表へ出る 權、ハイ何所へでも出ますと
も、何うせ家にはかり、道入つてゐることは出来ねへだから表へ出ま
すべし、ハア出ましたか、何うしたんだね、私が酒を買はねエと云ふ

大 高 源 吾

んでお前様方は寄つてたかつて私を打ちのめさうといふんだら
う、毆打られたつて根を出すやうな人間でねエからお前さま方の
勝手にさつしやるが好エ、サア何うでも爲なさりまし 甲、何を吐
しやアがるんでエ、一人が打つて来る奴をヒラリと躰を替して
ヨロ、と四路めいて来る奴を足を揚げてパーッ……と蹴上げ
たからドッ、と倒れた 乙、野郎何を爲やアがるんだと又
一人が打つて掛るを躰を引いて置いて平手で横ッ面をヒシヤリ、グラ
と、と眼が暗んでつんのめつた、右と左へ二人を倒し 權、へ、
、先づ權兵衛は斯んなもの面でも洗つてお出でなさいまし、何ん
ぼ生れは田舎でも此江戸の中央へ来て櫻屋を爲て居る以上お前
さんのやうな人に小馬鹿廻しにされた日にやア商賣が出来まし
ねエ、嘘お顔が痛うございませし、たらう、マア湯へでも道入つて身躰
の汚れでも直さつせませし……へ、馬鹿にしやアがるなと腹

大 高 源 吾

の中でせゝ笑つて歸つて行く 甲「何うだいマア那の權兵衛は
恐ろしい腕の節の強い野郎やアねエかなア」と呆れ返つて居る、斯
ふ出て来る奴には權兵衛一文も遣りませんが尋常に 甲「親方、誠
に済みませぬが此頃には張るとは取られ取られるとは張り、追目を
張つて手も足も出ません、實は家には子供も嗅アもありますんで
此大晦日が追付きませんが一兩ばかりお貸しなすつちやア下さ
いますまいか 權エ、好うございます、御心配なさるには及びま
せぬ、サア、お持ちなすつて……」と美麗に貸て呉れます、夫だ
から一統の者が 甲「那の櫻風呂の親方は國に居る時分は屹度好
い博奕打ちだつたのだらう 乙「然ふだ、何うも駒の切り方が素人
じやアねエ、夫に勢ひを示して金子を借りやうとするも、芥ツ葉一
本でも貸さねエ、頭ア下げて行けば嫌な顔もせづに貸て呉れると
は恐ろしい男だなア 丙「ウム素晴しい男だ」と自然と人が尊敬を

大 高 源 吾

加へるやうに成つて何かありやア櫻風呂の親方の所へ往つて仲
裁をして貰うが好いと云ふやうに成つて今では町内に何事があ
つても權兵衛が出て口を利く、町内の口利きに云はれて追々市が
利いて参りました。
凡夫盛んに神崇りなしと申しますが成程夫に遠ひございませぬ、
斯の如く麴町邊から番町四ッ谷邊へ掛けて男は追々と賣れて参
る、博奕を爲ても根が益皿の中から生れたやうな男ですから十兩
損をする内には必二十兩は勝つて居ると云つたやうな理由、本
業の湯屋は繁盛する、内に金鳥玉兎の足浪も早く何事も無く數年
ばかりといふものを過しました元録十六年十二月十四日大石内
藏之助殿を始めとして吉良の屋敷へ討入りをいたし本懐を遂げ
てお引揚げに成つた翌年の二月四家にお預けに成つた浪士四十
七人は切腹仰せ付けられ高繩の泉岳寺には一統の墓標は残つて

大 高 源 吾

居る、今度が丁度十七年の十七回期、高輪の泉岳寺に於て十七回期の大法會がある、其前から目算があつて、義黨四十余人の木像が出来るの或は皆さんが持つて居りました浪々中に艱難辛苦をいたし、主君の怨みを晴さうとした當時用ひた品々を陳列して、忠義の人の徳は斯の如く誰方も忠義にあやかるやうにと人々に見せ、當時の苦勞を後の人に追憶させやうと云ふので、頻りに心ある人が義士の遺品を取集めて居ります、彌々十七回期法會の當日に成ると義士の墓へお参りをしたい、木像を拜見したい、浪々中の遺物を見たいと云ふので、遠い田舎から皆草鞋掛けて出掛けて参りましたから、泉岳寺邊は大層な賑ひであります。

大 高 源 吾

に流行して、堀部安兵衛の持つた墨斗が三両に賣れたとか、小野寺十内が手習の師匠をして居た當時用ひた筆が一本五兩に賣れたの、勝田新左衛門が八百屋をして居た時の荷物が七兩に賣れたの、三村次郎左衛門が薪割りをいたして居た大割に小割に割臺が如何程に賣れたの、荷くも義士の遺物と名の付た物は、大變に直が能く賣れる道具屋さんは、斯ふいふ時に金儲けをしなければ成らぬといふので、八方へ手を分けて探し出しては、好い所へ持つて往つて賣込む大家では、價に構わづ、眞正の物でありさへすれば、是を買込みます、泉岳寺のお開帳は十二月の十四日に始まつて、六十日間の日限未だ熾りだ、丁度正月二十五日のことで、櫻風呂の權兵衛の家へ「お早うございませう」と這入つて来たのは、道具屋の金兵衛といふ男、權ヲヤ、金兵衛さん何うなさいました、金、エ、此頃は急がしくつて仕様がございませぬ、御承知でもげせうが、高繩の泉岳

大 高 源 吾

寺に義士の十七回期が始まつて夫から此方へ妙なもので義士の遺品といふと御素人方が何んな物でも争つてお買ひなされる何か旨い儲けをしたいと存じまして其が爲にアツチコツチを馳けて歩きますが扱て高が四十七人位いきやア無い方々の遺品何所にもあると云ふ次第でございませんから品が拂底で困ります何んと忠義の徳といふ者は素晴らしい者じやアございませんか 權成程忠義の徳といふ者は恐ろしい物へエー義士の遺品と云やア何んでも買れるんですかい 金エ、夫りやアモウ本物あら草履であらうか又合羽だらうか何んでも買れるんでグス 權私の所に義士の持つた懐中帳面といふのがあるが見せませうか 金へエー其奴ア一ツ拜見したいもんですといふのは悪の報ひの來るべき時節かモウ十七年も立つたのだから大丈夫なものであらうと考ひであつたのか 權今探して上げるからお待ちなさいと番臺

大 高 源 吾

を降りて奥へ這入る金兵衛は其間に一ト風呂這入つて來て身軀を拭て着物を着る 權金兵衛さん此品だ 金へエーと手に取つて打眺り懐中帳面元録十四年五月日藤原友重……藤原の友重……リヤア親方何んてエ人でせうねエ 權然ふさ唯藤原友重としてあるんだから私にも能くは分らない 金惜いなア中を拜見いたしますと明けて見ると成程四十有餘人が何所に住つて居て名を何んと替て居た何渡世をして誰が何所に居たといふ事が細かくゾーと書てある金兵衛は腹の中で此奴金儲けだと悦で 金エ、親方の前ですがモウ少つとは是が何んです密があるとか又は道具か何かで酷のある墨斗だとか脇差だとかいふ者だと直段も充分に取れますが……如何程か錢に成るには成りませうけれども充分な直にはナト…… 權好いやね何も私が夫を買つて小遣に爲なくつちやア成らねエの米の足に爲てエのといふのじやねへ

大 高 源 吾

金の一杯も喰へるだけに買れりやア結構だ金兵衛さん買る物なら
買つてお前さんも如何程か儲けたら好からう 金有難ふ存じ
ます夫じやア一つ私しが持つて往つて見せる所がございますか
ら如何程でも好うございますか 權ア、私の方は搦はれニ仕舞
つて置たからつてつて百にも成る品じやアねエからお前さんの
方で買れるだけに賣つて下さい 金然ふ仰しやつて下されば私
しも安心して賣つて来られませう夫では後刻……と金兵衛家へ馳
込んで来て 金婆アさんお證明を上げな 女房何うをしなの
金マア何んでも好いや寶が飛込んで来た 女夫りやア結構だね
ニ 金娘やお前横町の忍籠屋の吉五郎の所へ往つて神田江川町
の頭領の所まで大急ぎで三枚でやつて呉れるやうに訊ひて来て
呉れ……婆アさんお證明を上げたらば縮緬のお納戸の無地の風
呂敷を出して呉んなと金兵衛見世に並べてある品の中から金

大 高 源 吾

の切れを出して懐中帳面を包み桐の箱の中へ納めて恭々しく絹
紐を掛けましたる事にて縮緬の風呂敷に包み着物を着直して仕
度をして道具屋の金兵衛待つて居る所へ忍籠屋の若衆が 甲へ
エ旦那お待ち遠さまでございます神田江川町の頭領の所へ参り
ますんで…… 金ア、いつもの頭領の所までやつてお呉れ 金
ア、然ふですお頼やしやすせと忍籠へ乗つて江川町を差してド
ン／＼遣つて来る此神田江川町頭領喜右衛門といふのは何者で
あるかといふに大工の頭領でありまして恐ろしく義士に肩を入
れて何んな高價の品でも四十七人の持った品ならば買つて置
といふ熱心な人だ是は何んで職人の身として新しくまで熱心に義
士へ肩を入れるかどやしますと菅谷半之丞といふ人が喜右衛門
には縁のある人で元此喜右衛門さんといふ人は上杉様へお出入
りをいたして本所松坂町の吉良様の屋敷は此人が一手で引受け

大 高 源 吾

て自分が弟子を連れて往つて晝夜の別なく譜請をしたものであり
まする大工頭領喜右衛門といふ人は書圖を能く引く人であり
まして大石内藏之助が考ひた彼が一手で吉良の屋敷を譜請をし
たと云へば壁ひ吉良家の書圖面は上杉の千坂兵部が引いたにも
せよ己れが書圖を能く引けば参考の爲に寫し取つてあるであら
う奴を一つ手に入れて吉良家の書圖が手に入らば他日討入りの
節に大いなる力らに成るコリやア大工の喜右衛門に手を廻さず
んばあらずと大体遠謀のある人でございますから菅谷半之丞を
して江川町喜右衛門の家の裏も喜右衛門の家作へ住はせまし
た或一日のこと菅谷半之丞は家で尺八を吹いて居られました喜
右衛門の家ではお職人が大勢集つて酒を飲みながら流行歌か何
かをやつて居る奥の一間で喜右衛門の娘が琴を弾じて居る半之
丞是を聞まして 半ハテナ喜右衛門さんのお娘が琴を弾じて

大 高 源 吾

居るがいつものながら上手なものだ職人のお娘子にしては奥床し
い次第である……と餘り旨いから吾を忘れて半之丞が娘の琴に
合して居りました此喜右衛門の娘おしなさんといふのは上杉家
へ御奉公に上つて居たが身躰が能くないと云つて近頃では家に
居るので芝居見物や物見遊山をしても気が晴れない唯琴を弾じ
て居る内は幾分か気が晴れるといふ今娘が頻りに琴をやつて居
る喜右衛門が酒を飲みながら是を聞いて居ると半之丞が頻りと
琴に合して尺八を吹いて居る喜右衛門が 喜亦那の尺八とか吹
竹とかいふものをブーアカカカカカカカカカカカカカカカカカ
者の卜者だらう五月蠅じやアねエか政ア 政へエ頭領は用です
か 喜那の裏の浪人者の所へ往つて来て呉れ乃公ん所の娘が琴
を引掻いて居るのに負けねエ氣に成つて吹竹を吹いて居るとい
ふ法があるかつて騒々しくつて不可ねエから早速止める若し止

大 高 源 吾

めなけりア店立を喰わせると斯ふ云つたつて然ふ云へ しほお
父さん何んですねエ琴を引掻いて居るなんてエことがありま
か琴は弾じると云ふのでございませすよ 喜然うか乃公ア又ボリ
くッを掻て居るやうな真似をして居るから引掻くといふの
かと思つた しほ本當に困りますねエ人さまに然なん事を聞か
れると笑われますよ困るじやアございませんか地面家作を持つ
て居る頭領ども云はれる者が其様なことを仰しやるといふ事が
ありますか 喜マア何んでも好いや政早く往つて來い吹竹を止
めねエと店立だつて しほお父さん奈是マア貴郎は其様に亂暴
なことをばかりを仰しやいます向ふ様は向ふさまでお勝手になす
つて入つしやるものを何んば家主だからと云ふて是を止めさせ
るといふ事は出來ませすまい今私しの琴と尺八と双方で合して居
るんでございませす夫もは存じ無く止める杯と仰しやれば何の位

大 高 源 吾

いお心持を悪くなさるか知れませぬ 喜へエー汝エの琴と那の
吹竹と合して居るんだ何時合さうと相談をしたんだ しほイエ
相談はいたしませぬ未だ先方の浪人様は何んな方だか私しは
見たことも無し是が藝の徳でございませす 喜フムー合して居る
とは少つとも知らなかつた しほ何うかお父さん然んな事を仰
しらないで其お浪人さまをお招きすして下さい此所で琴と尺八
と合して見たいと思つたんですが 喜面白からう政ア待てく
し風向きが變つたい裏の浪人の所へ往つては浪入さまに家で
アカく遣らねエで此方へ來てやつてお呉なせエまし娘が尺
八と合してエといふんだから直ぐと來て呉れつて來ねエと云や
ア店立を喰せるつて 政へエ内の親方は何んてエト店立くど
いふが困つたもんだと政公皆谷の長家へやつて來て 政エ、は
免下せへやし浪人様アお宅でげすかい 半ヲ、是は喜右衛門

大 高 源 吾

殿方の職人かな何か多用でござるか 政へエ多用でござる今
家の親方が申しましたがね親方のお嬢さんが半月ばかり前から
屋敷から戻つて来やしたんで毎日々々ア、遣つて琴を引掻いて
居るんです就ては貴郎の尺八と嬢さんの琴と合してエと斯ふい
ふんでオヨクラお出でを願ひてエと云ふんですが恐れ入りやす
が直ぐと来ちやアお呉んなさいますまいか 半イヤ夫は恐れ入
ります 政来てお呉んねエな 半丁度幸ひのことでござれば唯
今参上いたします 政へエ 半唯今参上いたします 政分らね
エね参上てエのは何んの事で…… 半唯今上ります 政ナニ
三升なんて親方は飲みやアしねエから二升で好いよ近エから土
産杯は要らねエ 半ハハハ、未だお分りに成らんかな唯今参り
ます 政然ふですかへエ親方往つて来やした 喜浪人者は何ん
と云つたい 政唯今参上いたしますつて 喜何を…… 政参上

大 高 源 吾

といふのは來るてエ事ださうで…… 喜然ふか手敷の掛つたこ
きを吐しやアがると云つて居る所へ菅谷半之丞は出て参じまし
た 半今日は湯免下さいまし 政チャお出でなせエまし那の親
方へ裏の貧乏な浪人様がお出でに成りやした 喜ヤイ、大さ
な聲をするない此方へお上げさせ 政へエは浪人さま此方へ上
つてお呉んなせエまし 半ハイは免下せいましてサア取散してご
さいますか二階へお上んなすつて頭領は至つてイケンザイで
ございやすから何んか失禮な事がありましたもお腹を立ねエや
うに願ひやす自分の方が餘ッ程ゾンザイだ 半イヤモウ何う仕
りまして左様なればは免を蒙ひります 政何うか其刀ア二階へ
は持ちなすつて下せへまし外の奴等が悪戯をしたりイヨクリま
すと不可やせんから 半恐れ入りますでございます左様なれば
は免を蒙ひりますと腰の物を女に誇がれでも爲ては成りませぬ

大 高 源 吾

から自分で持つて静かに二階に上り傍の方へ大小を差置きまし
て園の外へ両手を突へ半は免下さいまし唯今は熊々お使ひで
ございまして有難ふ存じます手前お長屋内に住ひをいたす菅谷
半之丞と申します者でお見知り置かれて後來涉呢感に願ひます
と最も恭々しく一體を施しました喜お出でなせエまし然ふは
町宰じやア恐れ入ります切望ツト通つてお呉んなせエまし
免ぬエ小哥は股引を穿て居りやすから胡座を掻きやす貴郎も胡
座でもお掻きなすつて半如何いたしまして喜マアお袴でも
お取んなせエまし半イエモウお構ひ下さいますなおしほさん
はは屋敷へ奉公をしたいけあつて侍に對するの禮義は正しく初
對面の挨拶を終りました喜菅谷さんコリヤ小哥の娘で上杉
様へ奉公に上つて居りやすしたが加減が悪いので家へ歸つて來て
居りやすお前さんは尺八を吹くさうで娘は琴を引掻きやす翠と

大 高 源 吾

尺八と合してエと云ふ娘の望み一つ合してやつてお呉んなせエ
まし其代り店賃などは拂わなくつても好うございませうから
しは阿父さん本真に困りますマア貴郎は免遊ばして下さいまし
父は此通りの職人でございませうから半イヤモウは心配下さい
ますなお職人は思ふたいけの事を仰しやいますので何んども手
前共が思ふやうな事はございませぬと云ふ母も祖母も願りに心
配をして居りました喜菅谷さんマア一杯召上つたら何んなも
のでござエます半有難ふ存じますが手前は不調法物で……と
辭退いたして居りましたが娘が熱々と菅谷半之丞の風采を見る
と何しろ五万三千石の家中で一の美男といはれた位いの半之丞
色白く威あつて猛からざる美男しはア、一何んと無く好たら
しいお侍さん……とおしほは愛に始めて戀といふ風がドツと身
に染込みましたが借て爰で奉と尺八との合奏がありまして一同

大 高 源 吾

興に入つて燈火の付くまで楽しみまして半之亟不調法者といふのは遠慮しての一言充分の御馳走に成つて半誠は本日には馳走に成りまして辱け無う存じます喜音谷さん又明日来てお呉んなせエまし占者に出なすつた所が何うせ大した事はありますめエお前様の日頭位いは小哥が毎日拂ひますから来て娘の相手をしてやつて下さいまし半有難ふ存じますと浪宅へ立歸る翌日に成ると又ヤイ〜迎ひが来るから出掛けて往つて琴と尺八を合わせるおしはは半之亟が来ない日は消々として居るといふ斯る有様でございますから折々一間の内にて合奏をする内に早晩好い情交と成り半之亟おしはは水も漏らさぬ語らいをいたしました勿論おしははとて今年十九歳江川町邊での評判の美人半之亟と夫婦にすれば何れ劣らぬ内裏難であります或時のこと互ひに忍び合つて半之亟がいふには半おしははさん私しは見る陰

大 高 源 吾

も難い浪人者貴女は立派な地面持の頭領のお嬢さん頭領に知れたら互ひに折檻をされにやア成らぬ其苦しい折檻を忍んでも苦勞をして行末夫婦に成らうといふ思召しは貴女には無いでせうしは夫りやア半之亟様さまお情け無い一言でございます私しはモウ何んな事がありませうとも外に男は持ちませぬ何んな苦勞として私しは貴女に添う心持でございます半然ふですか夫なら私しも其覺悟で居りませうおしははさん私しは元繪圖を好んで敷きました未だに人の引いた繪圖を見ては傍ら修業をして居りますか頃日お父さんの仰せには本所の吉良様の譜請をした時の書圖があるといふ大層珍らしい譜請であるとの事だが其圖面をお父さんに内所で見せちやア下さいませうか二三日拜借すれば直ぐにお返し致しますが……しはエ、お易いことでございます確か親父の手文庫の内に仕舞つてあると思ひました

から私しが是を取らだして貴郎にお渡ししませうと思ひの爲に
は心も暗み前後の考へも無く處女娘の初戀容易く是を承知いた
して呉れましたから満足をして立歸る其翌日に成ると大工頭領
は内の弟子や職人を連れて出て行く同母さんは仲働きの女中を
連れにお湯に行く此間におしはは父の繪圖面の道入つて居る文
庫を明けて中から扇包みに成つて居る吉良公の請書をした繪圖
面を一つ取出だして跡は其儘元の通り手箱の中へ仕舞つて知ら
ぬ顔をして懐中に納め其日の夕方半之函が來たから是を渡す半
之函からおしはに渡した書付は未は必ずお前と夫婦に成る外に
女房は持たないといふ書附を貰つたから悦んで右の書附を大切
にいたして居りましたスルト二三日立つて菅谷半之函が何れか
へ逐電をして仕舞つたサア喜右衛門は心配をして喜裏の浪人
者は何うしたんだらうかなア店貸が溜つたといふ理由じやア無

し娘は那の浪人者が來て呉れるやうに成つてから大きに氣が引
立つたやうに成つたが困つたもんだと云つて居る就中おしはの
歎きは如何ばかり唯日々泣沈んで居りました借て此方は吉良の
書圖面が手に道入つて是を大石内藏之助殿が見て充分に手配り
がある此圖面には壁が二重に成つて居る所や又は椽の下から板
けて逃げるやうなことは委しくは書て無い然しながら取りの様
子が分つた且つ外の諸般の謀略も成就しましたから去らばと
云ふので元祿十五年十二月十四日の夜に討入りをして十五日の
朝に引揚げるサア近所の者は勿論江戸市中の評判は大變だ甲
ヲイ昨日淺野の浪人が吉良の屋敷へ亂入をして吉良の隠居様の
首を上げたといふ乙ウム一大したものだソレ見に行けと湯
道は上を下へといふ大騒動是を聞いた喜右衛門が喜夫りや大
變だ直ぐにお屋敷へお見舞に行かなくつちやア成らねエと仕度

大 高 源 吾

をして速しく出て行かんとする所へ家の若い者がモウ見物をして歸つて来た喜ヲ、吉何うした吉何しるマア親分大變なこどが持上つて仕舞ましたね今吉良様を引上げて淺野の浪人が兩國橋まで差掛つて來ると大公儀へお勤めの歸りだといふんで服部様とかいふ方が馬へ乗つて此方からやつて往つて此兩國橋は通すことは成らんと打留められたんで浪人は跡へ戻つて河岸通りを永代橋から泉岳寺へ引揚げるといふんですがイヤ何うも大變な騒ぎでございまして實に勇ましかつた皆火事騒束で鉢巻をして中には怪我をした者もあるし槍などを小脇に挿込んで槍の先へ切を巻附けて居るのもある何うも夫りやア豪氣でしたよ喜ウムー然うか勇ましかつたらう乃公ア吉良様へお出入りこそして居るが能く考ひて見ると那れは吉良の隠居の方が充分に悪い嘸淺野の郎家來は口惜がつて居るだらうと思つたが今日の

大 高 源 吾

心持は何んなだらう何人ばかりだつた吉然ふですねエ四十人餘でございまして夫りやア然ふと那の家の裏に居りました占者の浪人ね何んどか云つたつけ菅谷半之丞……那の人が居ましたせ、ヲ見ると那れも淺野の家來だつたんだ何うも勇ましい姿をして槍を提げて……喜へエー那の占者がコレ、娘汝エの翠の相手をしてアアカ、尺八を吹て居た占者は今日の仇討に遣入つて居たどよ人は見掛けに由らねエもんだなア那の方が淺野の浪士とは少つとも知らなかつた乃公は吉良様にお出入りをして居ながら斯んな事をいふのは不實のやうだが隠居は重々悪いア、淺野の殿様は嘸今日日本晴れのお心持が爲やう忠臣義士どもいはれる人が乃公の家作内に住つて居たといふは乃公の譽れだ何うだい大したものヒやアねエか、しは阿父さん夫りやア本當ですか夫ヒやア私しは斯ふしちやア居られな

大 高 源 吾

いと馳出さんとするから喜右衛門が喜ヲツト待て〜汝何所へ行くんだしは阿父さん誠に濟ないこのたが私しは那の菅谷さんと夫婦の語らいをしました喜ナニ那の菅谷さんと夫婦の語らいをしたとしはハハ喜誰に断つて夫婦の約束なんぞをしたんだいしは誰にも断はりやアしません人知れず両親の目を盗んで好い情交に成つたのであります喜旨くやりやアがつたなア傍から母親が母お前さん冗談云つちやア不可ないよ娘が淫奔をしたのを譽める親がおりますか喜イヤ然ふでねエ娘能く取つた〜忠義は百万年の末までも朽やアしねエ淺野の浪士が今度の仇討實に立派なものではねエか其一人と夫婦の語らいをしたてエのは此喜右衛門の譽れ汝エは忠義な亭主を持つたは女の譽れだ詰らねエ男と乳繰合つたのとは事が違う菅谷さんを貰つて来て汝エの亭主乃公の聲にしくつちやで成らねエ

大 高 源 吾

ナイ政ア亂籠を然ふ云つて来て呉エ泉岳寺へ往つたらお目に掛れるだらう政へイ畏りましたと忽ち籠籠が来る娘おしはを夫エ乗せて大工頭領の喜右衛門さんは飛ぶが如くに高繩の泉岳寺へ来て大石内藏之助殿に對面して段々今までの理由を話し是非半之丞様を貰ひ受けたいといふ時に内藏之助が内頭領辱けないが拙者を始め一同は吉良家へ討入りをして天下の法を犯した者であるから菅谷半之丞を貴郎の聲にすることはお出来ない喜夫は大石様困りましたな私は我慢をしますが娘が承知いたしせぬ那の方と夫婦に成らなければ死んで仕舞うとやして居ります内藏然らば菅谷と夫婦の約束だけは此所でさせる何うせ切腹は免れない者だに由つて跡に残つて問ひ吊ひだけはして下さるやうにと愛に半之丞を呼出だして泉岳寺の奥座敷で夫婦の盃だけはいたさせました兩人互ひに涙に呉れてしはモウ私は斯く成

大 高 源 吾

りますれば外に男は持ちませぬ貴郎の菩提は妾しが生涯吊ひま
すに由つて切腹といふ事に成りましたらば美事切腹をなすつ
て下さいまし忠義な良人を持つたは女の仕合せ今は侍の妻故に
女々しい事はやしませぬ半能ふいうて呉れたおしは天下の法
度を破つた吾等切腹は免れない然し不愍な花の蕾をムザ
と春にも逢わせず此儘老朽さして仕舞うは不愍千万と大きに氣
の毒がりましたしな喜右衛門も實に涙に暮れて大石様始め一統へ
お別れを告げて娘を連れて立歸りました翌年の二月七日に四十
七人は切腹をなされて其日を命日として喜右衛門の家では半之
函の佛事供養は愚かには無い去れば喜右衛門は義士四十七士に肩
を入るゝ事一方ならず喜右衛門さんと人が云つても返事をしな
い菅谷のお父さんと云ふと悦んで居る人が夫だから喜右衛門の
家へやつて来て 甲時に菅谷のお父さん誠に済みませんが斯ふ

大 高 源 吾

いふ理由で金子が五兩入用なんですがお貸なすつて下さいまし
ねエ菅谷の父さん 喜ウムー好し〜 心得た菅谷の親父だも
の承知をした 乙頭領斯ふいふ理由だから二兩お貸しなつ下さ
いやしな 喜馬鹿ア云へ貸すことは出来ねエに由つて外へ往つ
て都合をしるゝと押離さぬる長屋の者が店賃に困つて塞いで居る
所へ一人やつて来て 甲ヲイ金太何を鬱いで居やアがるんでエ
金何外でもねエが店賃が二十滞つて仕舞つて此大晦日に入れね
エと何うしても店立を喰わせるも斯ふいふんだ無理もねエが金
子も無し夫で心配して居るのよ 甲二十とは能く滞うらせやア
がつたなア一つ煽動つて待つて貰ひねエな 金何う煽てるんだ
甲菅谷のお父さんの前でございますがつてエやうな事を云つて
何んでも菅谷のお父さんを澤山いふやうにして言譯をして見な
か度待つて呉れるせ 金然ふか夫じやア一ツ出掛て見やう……

エ、涉死下さいまし 喜何んだ裏の金たか汝エは左官屋で乃公
の家が大工だ兄弟のやうな商賈だから因業は云ひたくはねエが
餘り非道いから弟子をやつたが都合をして持つて来たか 金、
エ所が菅谷のお父さんの前でございます菅谷のお父さんも
存じの通り先頃足場から落ちて暫く醫者へ掛つて居りました
菅谷のお父さんだつて足場からお落ちなされば醫者へ掛る何ん
ば菅谷のお父さんだつて怪我をすりやア醫者に掛らねエで直る
てエ事はございません夫や是やで終色々の入費が掛りました店
賃の方も無沙汰に成りやしたか何うか菅谷のお父さん來年の
廿日正月までお待ちなすつて下さいましソウすれば菅谷のお父
さんのお顔を潰すやうな事はしませんからせめて半分でも入れ
ますからねエ菅谷のお父さん…… 喜アムー然ふか好しく 汝
エが足場から落ちたのは先月だ店賃は去年の正月からだがマア

好いや店賃杯は入れなくつても好い乃公も菅谷のお父さんだ其
儘負けてやるよとアマチヨいと斯ふ云ふ次第でありますから今
回の十七回期にも一生懸命喜右衛門は義士の遺品といふと何ん
でも買う過日から色々な物を以て來て金兵衛が賣附けて好い儲
けを見て居りました前述の懐中帳面を金兵衛が此喜右衛門
に賣つた所から端なくも權兵衛の悪事が露顯をすることに成る
お話しですが直ぐに次ぎに上げます。

第 六 席

丸で古道具渡世は其向きに由つて賣込み方が上手に行けば旨い
儲けもある尤も道具ばかりでは無い其時々刻々の流行物に由つ
て大層旨い儲けをなさる人がある唯今でも義士の遺物と云つ
たらば随分金子に構わすお求めなさる方があらう況んや十七回

大 高 源 吾

期の當時夫に關係をして居る人であつたならば此れは何んでも
 お求めなすつたかも知れないさて道具屋金兵衛は三枚で神田江
 川町の大工頭領喜右衛門の處へ遣て来て 金へエ今日日は……
 谷のお父さん今日は…… 喜、金兵衛さん今お前の所へ人を
 遣らうと思つて居た所だ 金へエ何んか御用でふいますか
 喜、非道いじやアねエか金兵衛さん過日お前堀部安兵衛さんが八
 百屋をして居た時の天秤棒といふのを二両二分で置て行きなす
 つたが那りやア虚言だといふ本物の天秤は本所元町の或る家で大
 切にして居るといふ事を利いたが偽物を二両二分で押付けて行
 くのは非道い古道具屋へ行けば那んな物は五十文も出しやア買
 へるテ 金、イエ菅谷のお父さん誰が然んな事を云つたかア知れ
 ませんが堀部安兵衛さんが一本きやア天秤はねエと極つちやア
 居りません那れは折れる時の用心に代りの天秤棒でグス夫でお

大 高 源 吾

嫌なら二両二分置て行きますから那の天秤棒をお返しなすつて
 何所へでも羽が生て飛んで行く品なのですから………道具屋の金
 兵衛偽造品などは持つて参りません 喜、成程然ふいわれて見る
 と然ふかも知れねエマア待ちねエよ金兵衛さん怒つちやア不可
 ねエ何か珍らしい物を持つて来て呉れたかい 金、貸はね夫は夫
 是は是れだからお話しをするが今朝夜が明けると細川様のお屋
 敷からお使者が来たんです 喜、何所へ来たんだい 金、私共へ來
 たんです金兵衛其方の手許へ珍らしい物が遣入つたどすすが賣
 渡さぬかといふお使者で……… 喜、そうか何が遣入つたのだい
 金、マア黙つてお聞なさい菅谷のお父さん夫から私しが成程珍ら
 しい物が遣入りましたがお賣りすすことば出来ませんとお断り
 ましたんです 喜、へエー 金、するどお前さん加賀様から來る仙
 臺様からお使者が立つ方々から其品を賣れ、と云つては出で

に成りましたが皆お断りして今其品をお父さんの所へ持つて
来たんだか私ア大きな面をして居る大名杯は嫌エた品物は賣つ
てチヨイと儲かるやうだが交際へねエからねエ……大變な道具
屋があつたものだ 金、ア菅谷のお父さんの前だが大名杯に賣
るよりは職人の貴郎に賣る方が話しがサクくつて氣前が好いか
らね大きな事を云つてボン、小言ばかりいふ大名は嫌エサマ
阿父さん大變な品だに由つてお断りして置くがは覽なざるな
ら身軀を清めて夫から見ても呉んなさい 喜、ハ、ハ、何んだか
大變な能書といふじやア無いか 金、藥、能、書、程、利、か、づ、と、い、ふ、が、小
哥のは然なんじやアねエんで既に細川様加賀様をお断りし
てまで此方へ持つて来たんだに由つて手水を使つて夫から見
て下さいまし 喜、然ふかイヤに何んだか氣を揉ませると云ひなが
ら菅谷のお父さん手水を使ひ着物を着替て座り込んだ 喜、サ、

一つ拜見をしませう 金、拜見さして下さいましと紫縮緬の帛包
みを開くと中は桐の箱其蓋を拂つて取出した巻金の切れの中の
品 金、サ、是、で、ございます 喜、何んだい此りやア……元祿十四年
五月日藤原友重……ウム、藤原の友重……ヘエ、藤原友重ハテ
ナ藤原の友重……おしは其所から悴の友達の名乗の書である帳
面を持つて来て呉れしは「ハ、イ……」喜、好し……と明けて
見て居たが藤原の友重といふのは無い全体中には何が書てあら
うと頻りに見て居たが 喜、ナニ、茅場町に浪宅を構へ篠原五
郎兵衛前名郡奉行吉田忠左衛門兼相其次が神田江川町喜右衛門
店占易前馬廻役菅谷半之丞……ヤア金兵衛さん悴が居る 金、エ
、あるから持つて来たんです 喜、婆さんおしは悴が居るよ半之
丞は乃公の店に居たんだ忠義は豪氣なもんじやアねエか金兵衛
さん豪氣な物を持つて来てお呉んなすつたが 金、素晴らしい物で

大 高 源 吾

せう 喜ヨリヤア素晴しい品だ 金夫だからね 大名を断つて此
方へ持つて来たのです四十七士の前名浪宅商賣がチャーインと書
てあるんだ斯んな結構な品が又と再びあるものじやアございま
せぬ 喜時にヨリヤア如何程だい 金直段はね百も負りません
よと指を一本出して見せて居る 暫く考ひて居た喜右衛門が 喜
金兵衛さん一両かい 金「チヨ……」 笑談仰しやつちやア不可ませ
ぬ天下に二ツとねエ懐中根面加賀様だの藝州様だの細川様を断
持つて来た品一両とは何事でゲス菅谷のお父さん笑談じやアね
エせモウ、何んな結構な品物があつたつてお前さんの様な盲
目みてエな人には持つて来ねエ一両とは何んだい此方へお出し
なさい 喜「マア、」 然ふ怒らなくつたつて好いやな指を一本
出したから一兩かど云つたんだ夫じやア拾兩かい 金「不可ませ
んよ拾兩や二十兩で買へる品だか何んだか能く考ひて涉覽なさ

大 高 源 吾

いお大名へ持つて行けば五百兩には黙つてお買上げに成る其奴
を私しが菅谷のお父さんだから持つて来たんだ百兩です 喜「ホ
、ウ百兩……」 金直を聞いて驚くやうではお話しに成らねエ此
方へ下さいまし私しは直ぐは細川様へ持つて行くから 喜「マア
、」 待ちなよ金兵衛さん怒つちやア不可ねエ娘藤原の友重てエ
名乗りはあつたかい しは藤原の友重といふのはございません
ねエ 喜「ウム、」 コウ金兵衛さん藤原の友重てエ名乗りはねエど
いふ夫だから充分の直が出せねエじやアねエか 金「マア、」 お
止めなさいましな菅谷のお父さんとも云われる物が藤原の友重
一つ知らなくつては菅谷のお父さんじやアねエんだヨリヤア斯
ふいふ理由です大石内藏之助藤原友重といふんでサア 喜「ハテ
ナ大石内藏之助藤原の友重とは聞かなかつた大石様は内藏之助
義雄といつたなア娘、」 しは然うですなエ妾も然ふ承つて居りま

大 高 源 吾

したが 金夫だ がら不可ませんよ大石様は敵を討つ時に義雄と
改めたんで夫までは藤原友重と云つた事は赤穂の方や淺野の
本家は皆存じて……大石様の前の名乗りを存じてねえやうと
やア話せねえ菅谷のお父さま返してお呉んなせいまし直ぐに
籠に乗つて蕪州様へ行くから 喜マア待ねえ大石内藏之助……
藤原の…… 金然んなに疑るならお止しなさるが好いじやアと
さいませんか 喜マ急ぐものじやアねえ待らねえよじやア金兵
衛さん半分五十兩に負かるめエか 金ナニ五十兩……お大名
へ持つて行けば五百兩には成るものを……エ、菅谷のお父さん
だ昨今の中じやアねえ(ボン)ど手を叩き負けて置けッ安いな
ア 喜安からうけれどもマ勘辨してお呉れ何かて又理合せをす
るから…… 婆アさん其所から五十兩出して呉んね 女房五十兩
では阿父さん高いようだね 喜マア黙つて居ねえお前の知つた

大 高 源 吾

こつちやアねえ手を打ちやア此方の物だからと云が世の中は又
と斯んな品があるものじやねえと五十兩で懐中張面を買込みま
した。金兵衛五十兩の金子を懐中へ入れて腹の中でモ、ヲ笑ひ
籠を飛ばして立歸つて来たが 金イヤ若い衆は苦勞さま是は駄
賃だよ是は少ねエが一抔飲んでお呉れと二分の金子を放り出し
た 若何うも有難ふ存じますと若い衆は汗を拭き 歸つて行
く 婆お父さん何うしたい 金ア、一骨が折れた漸く賣付けて
来た何うも是だから染々道具屋は忘れられねえ那の小さな帳面
が五十兩に賣れたせ 婆アレマア五十兩……資本は如何程だい
金未だ拂やアしねえ借りて来たばかりだ如何程でも好いといふ
んだから一兩もやつて来たたら文句はあるめエと一兩懐中へ入れ
て櫻風呂へやつて来た 金親方先刻は…… 權ヲヤ金兵衛さん
何うしました買れましたかへ 金へエ段々先方へ往つて話しを

大 高 源 吾

爲て来ましたが先きでいふには何しろモウ少し儲があれは價も
好く買れるが如何にも薄過ぎるからといふんで漸う一兩に賣れ
ましたよ親方一兩でお悪るければ取つて参ります 權ハ、ハ、
そんな物が一兩に成りましたか紙屑にした日にやア一貫目如何
程で無くつちやア賣れない一兩で結構です…… 金「ヒヤア一兩
此所へ差置きますから 權然ふですかい夫では金兵衛さん實は
一坏上げるんだが斯んな熨り臭い家でお飲みなすつたつて旨く
はあるめエ二分ありますから鯉でもお上んなすつて…… 金「イ
エ何ういたしまして夫ヒヤア恐れ入ります有難ふ存じますと二
分買つて家へ歸つて来て 金「先づ婆アさん當分小遣がある世又
二分買つて来た 藝道具屋てエ物はお父さん太エもんだねエ一
兩の物を五十兩に賣付けて来て又一兩の内から二分買うなんて
餘まり冥利が悪いよ四十九兩二分の口銭とは餘り…… 金「歌の

大 高 源 吾

て居ねエお前が然んなことを云つちやア困るヒヤアねエ如何
程儲けやうと乃公の働きた男の働きで錢を儲ける奴を女の癖に
グズ云ふ奴があるものか…… 昔じは斯ふいふ惡い古道具
屋がありましたものでさて大工頭領の喜右衛門は買ひは買つた
が藤原の友重といふ名が氣に成つて叶わない腕を組んで考ひて
屋る所へチーンく「南無阿彌陀佛々々々々 喜「政ア……
政「へエ 喜「いつものお毘久さんか 政「左様でございます 喜「然
然んならなアお婆アさんに庭へ廻つて呉れると夫ふ云つて呉ん
ねエ 政「へエ…… 喜「お毘久さん家の頭領がお前に用があ
るといふから庭へ廻つてお呉れ二三尺の切戸口を明けて呉れた
から 喜「畏かましたと夫を這入つて小腰を屈めて襟側へ兩手を
突き 喜「親方様毎度お恵みを頂きまして有難ふ存じます 喜「お
びくさんお前はマア乃公の家へ來始めてからモウ十何年になる

大 高 源 吾

他家で一丈やるもんなら乃公の家じゃア四文や五文はやる殊に
毎日握り飯の二ツや三ツ宛は拵へて屹度やる……と云ふのも元
はと云へば播州赤穂の家申だといふ服部甚兵衛とやら女房お
前の亭主は赤穂浪人が仇討をしねエ前に死んで仕舞たつといふ
んで忠義な人だか不忠の人だか分らねエが聞きやア僅た一人の
娘や孫は人手に掛つたどかいふんで死別れお前はマア然ふやつ
て歩いて居るといふ乃公の家も少し淺野の浪人には縁があつて
夫で恵んでも居たのだが就てお前に今日は改めて聞きたいとい
ふのは那のお頭の大石内藏之助といふ人は名乗りは何んど云つ
たへ び左様でございます私には婦人の事でも仰しやつたやう
しいことは存じませぬけれども確か義雄さまと仰しやつたやう
でございます 喜然ふだ乃公も義雄と心得て居るそこで藤原友
重といふのは誰の名乗りだかお前は知らないか び左様でござ

大 高 源 吾

います私しの良人は同家中の者で良人が居れば存じて居りませ
うが…… 喜ヲイ〜元談云つちやア不可ねエ十年も前に死
んだ者を今然んな事を云つたつて押付く理由で無いが誰か外に
聞いて呉れる人は無からうか びございますよ深川仲町に私し
の亭主と同役をして居りました方が今では商ひをして居ります
此方は赤穂の方々が仇討をした頃は死ぬか生るかの大病で忠義
の名は現わしませんでしたとございましたか此人に聞いたら分らない
ことばはございませぬ 喜然ふかい其お方に一つ聞いて貰ひてエも
んだが何うだらう び畏りました早速聞て参りませう 喜今日
といふ理由には行くめエから明日の朝迄に聞いて来てお呉れ明
日の朝成丈け早く出て来て呉んねエ知れても知れなくつてもお
前に錢を二百やるから び有難ふ存じますイエ遠いどやした所
が高が知れて居りますから今日直ぐ聞いて参りますでございま

大 高 源 吾

す 喜 夫 り や ア 結 搦 だ 今日 直 ぐ に 知 れ り や ア 尙 外 に お 前 に は 心
注 け も や ら う か ら なら ば お 婆 ア さ ん 直 ぐ に 歸 っ て 來 て お 呉 れ ソ
し て 今 夜 私 の 家 へ 泊 る が 好 い な ア 今 夜 泊 っ て 明 日 の 朝 家 から 鉦
を 叩 いて 出 ら れ ち や ア 困 る が 家 から 兎 も 角 出 る が 好 い び っ っ っ
有 難 ぶ 存 じ ま す …… び っ っ っ 有 難 ぶ 存 じ ま す 夫 じ や ア 是 ち 直 ぐ に
往 っ て 參 り ま せ う と 出 掛 け ま し た は 是 れ 前 回 に 述 べ た る 所 の 服
部 甚 兵 衛 の 女 房 深 川 の 雲 光 院 門 前 へ の 何 號 とい ふ 所 へ 住 っ て 江
戸 中 を 鉦 打 鳴 ら し て 修 業 を し て 歩 く 道 は 表 向 き に し て 賢 は 賢 娘
の 敵 直 助 の 行 術 を 探 し 老 婆 の こ と 故 に 自 分 の 手 で 敵 は 討 て な い
に 由 っ て お 上 の 手 を 借 り て 敵 を 討 っ て 頂 う とい ふ 老 婆 の 一 徹 心 十
數 年 の 今日 ま で 斯 ふ や っ て 歩 いて 居 る の で あ る 此 老 婆 が 深 川 仲
町 へ 來 て 物 を 聞 か ん とい ふ 人 は 前 名 は 何 ん と 云 っ た か は 存 じ ま
せ ぬ が 當 時 小 林 久 之 進 と 云 っ て 荒 物 見 世 を 開 き 服 部 甚 兵 衛 と 同

大 高 源 吾

役 で と ざ い ま し た 身 軀 が 悪 く て 霧 中 に 加 わ ら な かつ た が 尤 も 身
分 は 輕 る し 大 石 様 が 這 入 る と 云 っ た 所 で 或 は 黨 中 は 加 な かつ た
か も 知 れ な い が 兎 も 角 も 始 め 仇 を 討 た う と 云 っ て 約 束 を し て 這
入 ら ない の で 無 い か ら 人 が 不 思 だ と も 何 ん と も 云 わ ない 然 し 忠
節 の 深 い 人 で す か ら 連 月 十 四 日 と 二 月 の 七 日 に は 佛 參 を 欠 し た
こ と は あり ま せ ぬ 今 見 世 に 居 り ま す 所 へ び っ っ っ 今日 は お 寒 う と ざ
い ま す 久 っ っ 妙 林 かい サ ア 勝 手 許 へ お 廻 り 先 刻 家 内 が お
前 の 好 き な 物 が 出 來 た か ち 來 れ ば 好 い が と 云 っ て 居 た が 妙 有
難 ぶ 存 じ ま す 且 那 様 に 少 々 伺 ひ た い こ と が あ っ て 參 り ま し た
久 聞 く こ と は 跡 で も 好 い 早 く 勝 手 元 へ お 道 入 り 妙 有 難 ぶ 存 じ
ま す 心 は 急 ぐ が 仕 方 が 無 い 臺 所 へ 往 っ て 阿 部 川 餅 を ば 馳 走 に 成
つ て 居 る 所 へ 久 之 進 が 久 聞 た い こ と とい ふ の は 何 ん だ い 妙
ハ イ 外 で も と ざ い ま せ ん が 神 田 の 江 川 町 に 大 工 頭 領 の 喜 右 衛 門

大 高 源 吾

さんといふ方があるんでございます 久ウムく 過日いろく
話しをした菅谷さんを掣にしたとかいふ大層分つた頭領かい
妙左様で此方へ今日参りましたら四十七士の内で藤原の友重と
いふ名乗りを附けた人は誰だらうと聞かれましたが私は女で能
く知りません夫りやア誰方の人の名乗りだか貴郎にお聞きした
ら分るだらうと存じて参りましたんでございます何が何うか教へ
て頂きたいものであります「藤原の友重……夫りやア何んに
書てあつたのだい 妙ハイ其頭領の家で義士の懐中帳面といふ
物を或る古道具屋からお買ひなすつたのでございます其表紙に
藤原の友重と爲てございますんで……」ヲ、然ふか妙林悦びな
妙ハイ其藤原の友重といふのはお前の掣の小山田庄左衛門の名
乗りだ夫を賣りに来た古道具屋から段々と洗つて元の出た所を
探りやアお前の可愛い娘や孫の敵を討つことは何んでも無い小

大 高 源 吾

山田庄左衛門藤原友重…… 妙ハイ夫じやア私しの掣とんの
「然うヨお前の掣とんの小山田庄左衛門も不圖した所で不忠の名
を取つた私も同じ忠義に漏れて仇討にこそ行かないが然し私の
は約束をして討入りしに漏れたので無い死ぬか生きるかといふ大
病であつたので一統の方と評定の列へ加わること出な
つた然し今でも自分の仕へた主人の命日や一統が切腹の
日を忘れたことは無い九牛一毛は亡魂でも慰めやうと忌日々々
には必き備物を爲て坊さんを呼んで佛に仕へて居る夫だから人
に不忠とは云われないが陰で不忠な奴であると思召して居る方
もあるかも知れないお前の掣の山田三成懐中帳面は放さず紙入
れの中へ入れて持つて居たのは私ア知つて居るに由つて其を持
つて居た男が必ず箱持の直助に違ひ無いから 妙有難ふ存じま
す夫では是からモウ一遍往つて参りませうと暇を告げて杖に絶

大 高 源 吾

りトボく江川町の喜右衛門の處へやつて参りました 喜イ
ヤ一婆アさん今日で無くても好かつたのに老人の身で往つたり
來たり大變だつたなア 妙イエ何ういたしまして格別遠い所で
もございませんから又参りますでございます漸う分りました
喜分つたか何んといふ方だい 妙エ、小山田庄左衛門藤原の友
重と申します人 喜ナニ小山田庄左衛門藤原の友重……大石
内藏之助様じやア無エのか 妙大石内藏之助様は義雄と仰しや
るので 喜然ふだらう何うも乃公も大石さまじやアねエと思つ
た小山田庄左衛門といふのは義党の内へ加はつて討入りの夜に
變心をした不忠な人中々五十兩の價値はありやアしねエ那の畜
生非道い物を置いて行きやアがつたなア忌々しい奴だ 妙就ま
しては貴郎様に少々伺ひますか此帳面を賣りに参つた道具屋は
何んといふ人で何方に住つて居る人でございませぬ 喜可笑なこ

大 高 源 吾

とを云ふじやアねエかコリやア何んだよ麴町の四丁目に住つて
居る道具屋の金兵衛といふ人から乃公は買つたんだ 妙左様で
ございませるか有難ふ存じますでございます 喜ア今日は乃公
ん處へ泊つて行きねエ是から深川まで歸つて燈火を付けて寝る
といふのも大變明日の朝此處から直ぐに貫ひに出れば好からう
妙有難う存じます 喜おどめや臺所へ上げて飯を喰わして寝か
してやれ せめて畏りました人の門へこを立ちますか乞食といふ
理由でも無し金子は可成持つちやア居りますすが響と娘の敵を討
ちたいと困苦をいたして居る婆ア様だ其夜は是へ泊りまして翌
日に成りますすと此膳を喰べて妙倫は杖を突張つて一生懸命に麴
町四丁目の新道具屋金兵衛の門口へやつて來ました 妙は免
下さいまし 金ハイ……無用だよ物貰ひの癖に免下さいと
は可笑な乞食じやアねエか 妙イエ手の内を頂きに参つたもの

大 高 源 吾

ではありませぬ道具屋の金兵衛さんてエのは此方でござぬませ
 うか 金如何様道具屋の金兵衛は私共だが何んだい 妙旦那様
 は入つしやいますか 金主人は私だが何んだいお思久さん其處
 で無く此方へお這入り 妙有難ふ存じます失禮さまですが昨日
 大工頭領喜右衛門さん方へ義士の懐中帳面をお買込みに成りま
 したのには此方さまでありませう那れに就て少々伺ひたいので
 が何處から那れはお買入れに成りました其元をお聞申したいん
 でございますか 金那れかね……マア其處へお掛け……何うも
 困つたなア婆アさん其處から小判を一枚持つて來な……おビク
 さん濟ねエがねお前に一兩上げるから何んにも云はづに歸つて
 お呉れねエ頼むから 妙イエ私しはお金子杯を頂きたくて參つ
 たのでは無いので先方へ參つて少々お話しがしたいことがござ
 います 金困つたなア何うも……マア婆アさんモウ一兩持つ

大 高 源 吾

て來なモウ一兩上げますからね何んにも云わせに歸つてお呉れ
 ねエお願ひだから 妙私しはお金子を頂きに參つたのではござ
 いませんといふのに…… 金困つたなア……お婆アさん分らね
 エねエお前はグズ 云わねエで二兩持つて歸つて呉れたつて
 好いだらう 妙イエ若し貴郎が仰しやつて下さいませんければ
 町内の自身番へお頼みして名主様へ出まして町奉行へ…… 金
 マ待つて呉んねエ困つたなア 女房夫だから云わぬ事ちやア
 無いよお前が餘り非道い儲けを爲過ぎるから斯んな事に成るん
 だよ 金本當に困つちまつたなア町奉行へなんぞ出られて堪る
 ものじやアねエ夫じやアいふがね實は此隣り町の櫻風呂の權兵
 衛さんといふ人から買つて來たんだよ 妙左様でございますか
 貴郎は喜右衛門さんの所へお出でなすつて大石内藏之助藤原友
 重と仰しやつたさうで 金下……下……何うもハヤ 妙大きに

大 高 源 吾

有難ふ存じます 金お婆アさん櫻風呂へ往つて詰らねエ事を云
つて呉れちやア困りますよ喜右衛門さんの所へ賣込んだ金高を
云われると權兵衛さん何んなに怒るか知れねエ大感動が持上が
るからヨウお婆アさん……ア、モウ往つちまやアがつた喉ア一
両で買つて五十兩に欲込んだなんてエことを聞いたら櫻風呂が
怒りやアがるだらうなア 女房せめて半分も向ふへ拂つて置き
やア好いのには二分は随分非道いよ金儲けは男の働きたと能くい
ふがお前さんの盗ッ人より非道いんだからね若し掛合ひ込ま
れりやア五十兩耳を揃ひて置かにやア成らない 金夫だから婆
アさん金儲けをしても騙るなどいふのに差身だア塩焼だど頭痛
ちまつたから干減りが立つて仕舞つたらう困つたもんだと頭痛
鉢巻此方は妙倫がムーンくく 妙南無阿彌陀佛々々々々々々々々
と女湯の方から斯ふやつて覗いて見ると未だ朝の内だから客は

大 高 源 吾

一人か二人か居ない番臺から 甲ヲイ上げるよ 妙有難ふ存じ
ます南無阿彌陀佛々々々々々番臺に座つて居る人を覗いて見
ると二十四五の男全で人が遠う 妙コリヤア奉公人か知らんと
又暫く立つて男の方へ 妙ナムアミダブツく 男ヲイく 婆ア
さん男湯も女湯も一つ家だよ門口が二ッあるからと云つて別々
に來られちやア困るじやアねまか五月蠅エ婆アだなア 妙ハイ
恐れ入りますすと叱られたから櫻風呂の前を戻つたり往つたり戻
つたり往つたりして居る内に 權サ、頼ひせ源殿 源へエ親方
往つて入つしやいましては苦勞様で飛んだ遠方でございまして
權遠方でも仕方がねエ頼まれて見りやア町内の事だし免れる理
由にも行かないと白足袋に雪駄穿き袴を着けて立派な身拵を爲
て 權頼むよの一言を残して出掛けて行くのを表に居て笠の内
から妙倫が能くく 見ると顔は二夕目とは見られぬッ、りだ

大 高 源 吾

らけではあります。が何所か姿に見覺ひがある。今頼むよの一言其
聲は確かに直助の聲。後姿を見送つて置いて。妙番臺の親方少々
伺ひます。男何んだい。又來たのか。五月蠅なア。妙イエお貰ひす
しに來たのではありませぬ。今出て入しつたのは。當家の親方で
ございますか。男然ふよ家の親方の權兵衛さん。と仰しやるのだ
妙ハイ有難ふ存じます。とはぐれぬやうに權兵衛の跡を尾來ると
町内の呉服屋さんの隠居がお亡くな。なんすつて交際で施主に
立つといふんで。お葬式は何方だと妙倫が聞いて見ると。築地の門
跡の地中だといふ。此人達の跡へ尾て行けば。權兵衛が直助でない
にもせよ。饅頭なり赤飯なりが貰へて。今日の立前には成るといふ
心持があるから。お葬式の出るのを待つて。跡から尾て參りました
前へ廻つて見ても。後から見ても。横から見ても。何うしても。直助に
遠ひ無い。如何程顔を變へても。舉動言語音聲に變りの無いもので

大 高 源 吾

ありまして。斯るべしとは夢にも知らぬ。櫻風呂の權兵衛が運命は
目前に差迫つて參りました。が捕縛の手續きは次回に……

第 七 席

物本末あり事終始ありと申し傳へてあります。が成はせ夫に違ひ
ございませぬ。彼の櫻風呂の權兵衛が毎度申上げる通り。是で濟め
ば誰でも悪いことをいたします。人を殺して富貴を得やうとした
から。自分が殺されるやうな事にならなけりやア。納りは附かない
借て妙倫が段々様子を伺つて。築地本願寺の地中へ着きました。交
際の廣い呉服屋さん。と見へまして。供に立つ者も随分ありました。た
施主も丁度十一人。お経が濟み見送りの客は歸つて行く。婆ア様は
那方へ行き。此方へ行き。背中へ赤飯の包みを三ツ入れて。跡は懐中
へ三ツ兩の袂へ二ツづゝ、貰ひ込んで。先づ立前が出來た。始終權兵

大 高 源 吾

術に目を注げて居る狸葬も濟んで施主の人々は袴を取り供の男
の袂箱へ皆入れさして其男は袂箱を擔いで歸つて行く皆着流し
姿に成つて話しを爲し「ポッ」戻つて来る何うしても斯ふ
しても藥箱持の直助に相違無い直付と云ひ聲と云ひ姿と云ひ夫
とは極つたやうであるが兎も角も一番目的とする顔が變つて居
りますからウツカリは掛れませぬコリヤア一層の事後から大き
な聲を爲て藥箱持の直助待てと云つたならば果して其人間で
無かつたなら驚きやアしない當人であつたら嚇くであらう喫
驚したら取捕いて今の名代の大岡越前守様といふ方へ訴へて關
べて頂こう然ふしやうといふ見が出たから右の婆アさまがハ
タ「く」後がれ馳出して來た一生懸命大きな聲で「妙主殺
しの直助待てッ……」野郎ヒツクリしてハッとい尺ばかり飛上つ
たコリヤア飛上がらアね始めて自分で氣が注いで「權エ、大き

大 高 源 吾

な聲を爲やアがるなア「甲權兵衛さん大層お驚きなすつたが何
うなさいました「權ナニ手後で突然に大きな聲を爲やアがつた
もんだから私ア虫が強いんで飛上つた斯んな大人に虫氣があつ
て堪るものか心が願動して居るから斯んな間抜けなことを云ひ
ました然る所へ後から追付いて突然袂を押へ「妙サア主殺しの
直助私しをよもや忘れやアしなからう深川の三角屋敷に住ひを
して居た服部甚兵衛の女房汝いの爲に聲せんは閻魔堂で撲殺さ
れ娘は家で斬殺され孫の二人は馳り斬り私しばかりは様の下へ
逃込んで助かつた今日まで斯ふして居たのもお前を尋ねやうと
思つて苦勞をして居た「權コレ「冗談をいふな詰らねエ
ことを云つちやア不可ねエ「甲婆アさんお前何をいふ此方は麴
町六丁目の櫻風呂の權さんといふ親方だ湯屋の旦那だ然んなお
前悪いことをする方じやアねエ「妙イ、エお前さん方の存じ

大 高 源 吾

の事じやアありません餘計なことを仰しやるなア直助自身番へお出で是からお町奉行の大岡様へ訴いて白い黒いを分けて頂くから……能くも……酒阿々々ど歩いて居やアがつた聲殺し……孫殺し……權ナ、何をいふんだ婆アさんお前夫は人違ひだらう何んだ私が……妙エ、イ謂ふな吐すな盗人猛々しいと汝エの事だサア来やアがれど金切聲 甲「何んだ」乙「往つて見る」大變だ 甲「那の婆アさんは何んだらう」乙「ナアニお前那の婆アさんが金子を澤山持つて居たんだ夫を那奴が色仕掛けで旨く卷上げて仕舞つてフイトコセを極め込んだ奴が今見付つたのだとよ 甲「笑談いふねエ男の方と云つたら類の無エ面付で女は婆アさん色事でエ柄ではねエや……ナヤ」主殺しだつて……藥箱持の直助……ナ、大變な奴だなア何方が何をしたんだか分らない「ア、」と云つて居る權兵衛の直助

大 高 源 吾

は是んな婆アさん位い踐倒して逃げるのは理由はねエが何しろ見物が廻りへ黒山のやうだからへマをやつちやア大變所へ向ふから大岡様お手附き大竹作十郎様といふのが供方を二人連れて作「寄れ」何んだ茂兵衛 茂「へエ 作「能く調べて見る 茂「ハッ……エ、ヤ上げます主殺しださうにございます 作「ナニ主殺し……主殺しと云へは容易ならぬ事だ兩人を引けッ 茂「ハッ見物退け」と旦那方が其所へお出でなすつた茂兵衛徳兵衛といふ兩人が来て 茂「コレ老母見れば其方は鉦を叩いて修業して歩く者のやうだが其方が唯今すす所を聞くに主殺しださうだな 妙、左様でございます有難ふ存じます好い所へ出張下さいまして是は直助といふ奴でございます太エ奴でございます私しの娘を殺して聲と孫を二人……直「お役人さま私しは然んな者ではございませせん 茂「イヤ夫は老母が年を取つて居るから人違ひをせ

大 高 源 吾

んといふ限りも無い兎も角も自身番へ参れ直夫は何うも……
茂身に覺が無ければ一應調べれば分るア参れ飛んでも無いこ
とが出来たとは思つたが仕方が無い自身番へトッ引上げら
れました町内から尾て来た人達は膽を潰して關係人に成つちや
ア成らんと思つたから皆逃失せて仕舞ました唯一人權兵衛の隣
りの旦那が捕つて供に自身番へ上げられた正面に大竹作十郎様
がお着座に成つて兩人の岡ッ曳は權兵衛の左右に扣ひられた尤
も主殺しと云へば容易ならぬ事でありまして自身番へも目配せ
をしたから町役人も用意をいたして居りました先づ當人の懐中
物や何かを預りました大竹さまが名前を尋ねなされる作麴町六
丁目櫻風呂の權兵衛其方は何歳になる權へエ四十五歳に相成
ります作ウム是なる女が其方の事を藥箱持の直助主殺しなど
アすが其方は覺へがあるか直イエ私しに置きましては一向に

大 高 源 吾

覺ひございませぬ作ヲ、然ふか……コレ其方は如何なる所を
押へて主殺しだ藥箱持の權兵衛とアすや證據があるか妙ハイ
は意でございます顔は全で違つて居りますが藥箱持の直助に違
ひございませぬ……といふは目付ささと云ひ鼻附と云ひ歩き附き
と云ひ藥箱持の直助でございませぬ唯今を去りますること足掛け
十一年前でございませぬ私しの聲が山田三成とアして深川三角や
しきに醫者を開いて居りました前名を小山田庄左衛門とアしま
す其聲山田三成の方へ奉公をして藥持をして居つたのが此直助
でございませぬ十一年前の十二月十四日深川仲町の商人の家から
急病人があるからと雪の夜に迎ひが来ました節山田三成が出て
参り此者が供を爲て参りましたが遠くもあらぬ間廬堂橋の橋上
で藥箱の棒を以て此者が打殺し相州秋廣といふ三成の刀を以て
致命の一刀を差し死骸を川へ投込みまして立歸り旦那がお歸り

大 高 源 吾

どすしすから私の娘則ち三成の女房が迎ひに出ました所を突
 然と切殺し尙下女一人孫二人を切殺し私しは様の下へ逃込んで
 危い所を助かりました其節は御願ひの上さまで承知
 の如くお配符人相書が廻つてのお尋ね者今日まで何うも分りま
 せぬ據る無く私しは金子は残らず直助に盗まれましたから三成
 の家を賣つて雲光院門前の裏長屋に住つて江戸中を修業を爲て
 此者を索しながら其日を送つて居りました昨日兼々お情けを蒙
 ひる神田江川町の大工頭喜右衛門さんの家へ來りまするとい
 ふと其喜右衛門さんといふ方が盡く義士四十七人の遺品を愛し
 て昨日懐中帳面といふのを買つたんでございます賣つた人はど
 聞まざと麴町四丁目の古道具屋金兵衛といふ人が賣つた品だと斯ふし
 つて聞ますと櫻風呂の権兵衛といふ人が賣つた品だと斯ふし
 ました尤も私しも然んな事を聞詮して歩くには及ばないんで

大 高 源 吾

さいますが喜右衛門さんの所へ私しが参りますと懐中帳面に持
 主は藤原友重としてあるお前は元赤穂の者だから聞いたら分ら
 うが誰の事だと聞まますから私しは女の事で存じませんが傍へ往
 つて聞いて参りますからと深川仲町の小林といふ元私しの良人
 と同役の所へ往つて伺ひますと小山田庄左衛門藤原友重といふ
 のはお前の控の名乗りだから……小山田庄左衛門は此懐中帳面
 を始終紙入れの中に入れて居つた故に此品を持つて居る奴を尋
 ねれば必ずお前の控を殺した者は分ると斯様申して呉れました
 夫から私しも悦んで段々此男の賣つたことを探りましたが品物
 を持つて居た男ばかりでは無く確かに直助の成れの果てといふ
 ことが分りましたから取押へたんでございます顔附こそ違つて
 居ますが口の利きやう聲柄から歩き付きモウ直助に違ひありま
 せん何うかお取調への程を願ひますでございます若し此人が主

殺しで無く直助で無ければ私しがお處刑に就きましても苦しく
 ありませぬお上の威光を以て白状をさして頂きたう存じます
 と涙を流して妙倫といふ老婆が話しをするのを大竹作十郎殿が
 チャンと膝に手を突いて聞いてお出なすつたが作「ウム一
 理だ好い」一通り相分つた………權兵衛其方は直助に相違無
 らう汝の主殺しなることはお上の手帳にも留つて浦々津々全國
 至る所に人相書が廻つて居るぞ其覺ひは無いか權「決して私しは
 直助杯とすしたことはございませぬ作「無いといふ以上其懐中
 帳面は何れから汝の手に這入つた權「へイ………作「其懐中帳面
 といふのは何所から其方の手に這入つた權「へイ夫はッ………た
 が洗石に大膽不敵の直助の奴も腹の中で直ア、一飛んでも無
 いことをしたワイ庄左衛門の紙入れは棄て仕舞ひ何も彼も捨て
 仕舞つたんだが何うしたか用筆筒の抽斗に這入つて居た那の帳

大 高 源 吾

面金兵衛に話されてよもや斯んな事に成らうとは思はず僅か一
 兩に賣拂つたのは残念であつた那の帳面から尻が割れるとは恐
 ろしいものであるワイと頭を垂れて居りましたモウ確かに犯罪
 を犯したと見て取つたから大竹様が作「彼に繩を掛ける下役
 ハッ………と云ふと忽ち本繩に掛けて仕舞ました作「何しる其方
 は胡論な奴だ答ひの速かならざるは汝が罪を犯した證據………コ
 リヤ妙倫其方は好うこそ心注いで此者を取押ひたお奉行に此儀
 を申上げて嚴重に取調べ敵は上に於て取つて遣わす妙「有難ふ
 存じます作「何しる今日は引取るが好い妙「夫では此者は………
 作「イヤ此者は上に於て確かに預かるから妙「左様でございます
 か何分宜しく願ひますと妙倫は自分の住居を申上げて万事修禮
 を述べて引取りました跡に作「町役人最早今日は七ツ半である
 から此者は明日まで預れ明日町奉行へ召連れ参るやうに一回

大 高 源 吾

大 高 源 吾

百九十七
畏りましてございます小田原町二丁目の自身番屋へ預けて大竹
の旦那はお歸りなさる扱て翌日町奉行へ引立てまして時のお係
り名奉行大岡越前守様が權兵衛を段々お調べに成りました所が
流石の權兵衛何うしても隠すことが出来ない實は斯様々々ど有
し次第を白状いたしましたから爰に刑が取極つて直助は千住小
塚原に於て引廻しの上磯刑に處せられましたた必さへ正しくは義
士として後世に名を残せる庄左衛門が一朝の間違ひから不忠の
名を残し斯る悪漢の手に最期を遂げる實に忠孝を欠た罪は恐ろ
しいものであります世の戒草にもど大高源吾の傳に添て口演い
たしました。

大 高 源 吾 終

明治四十一年六月一日印刷
明治四十一年六月五日發行

大高源吾奥附



講 演 者 揚 名 舍 桃 季

大坂市東區安土町四丁目三十八番屋敷

發 行 者 石 田 忠 兵 衛

大坂市西區立賣堀南通貳丁目二三五番邸

印 刷 者 蒲 田 德 次 郎

大坂市東區安土町四丁目

發 賣 所

積 善 館 本 店

(電話圖東一三〇番)
(振替貯金二〇六六番)